



中野区立中央図書館

はじめに

中野区の道路については、当館の調べものコーナーでよく聞かれる質問の一つです。毎日通る道路のことですから、たくさん本が出ているのでは？と思われるかもしれませんが、残念ながら、道路を主題とした資料は少なく、それぞれの道路の資料はなおさらです。過去の道路名はほとんどが通称なので、正しい読み方がわからないこともあります。そこで自ら資料を作ろうと今回の展示を企画しました。

調査にあたっては過去に中央図書館が調べて発行した『中野いにしへの道』（平成16年）という冊子の内容を検証するところから始まりました。中野地域は関東大震災までは郊外で地図の必要性が少なかったためか古い地図自体が僅かしかありません。また、昔の資料にある道の情報は「〇〇から出て△△を通り、◇◇に合流する」というような文字情報がほとんどで、数少ない絵図や地図を見ながら、文章と照らし合わせたり、あるいは見比べていったりする作業となりました。

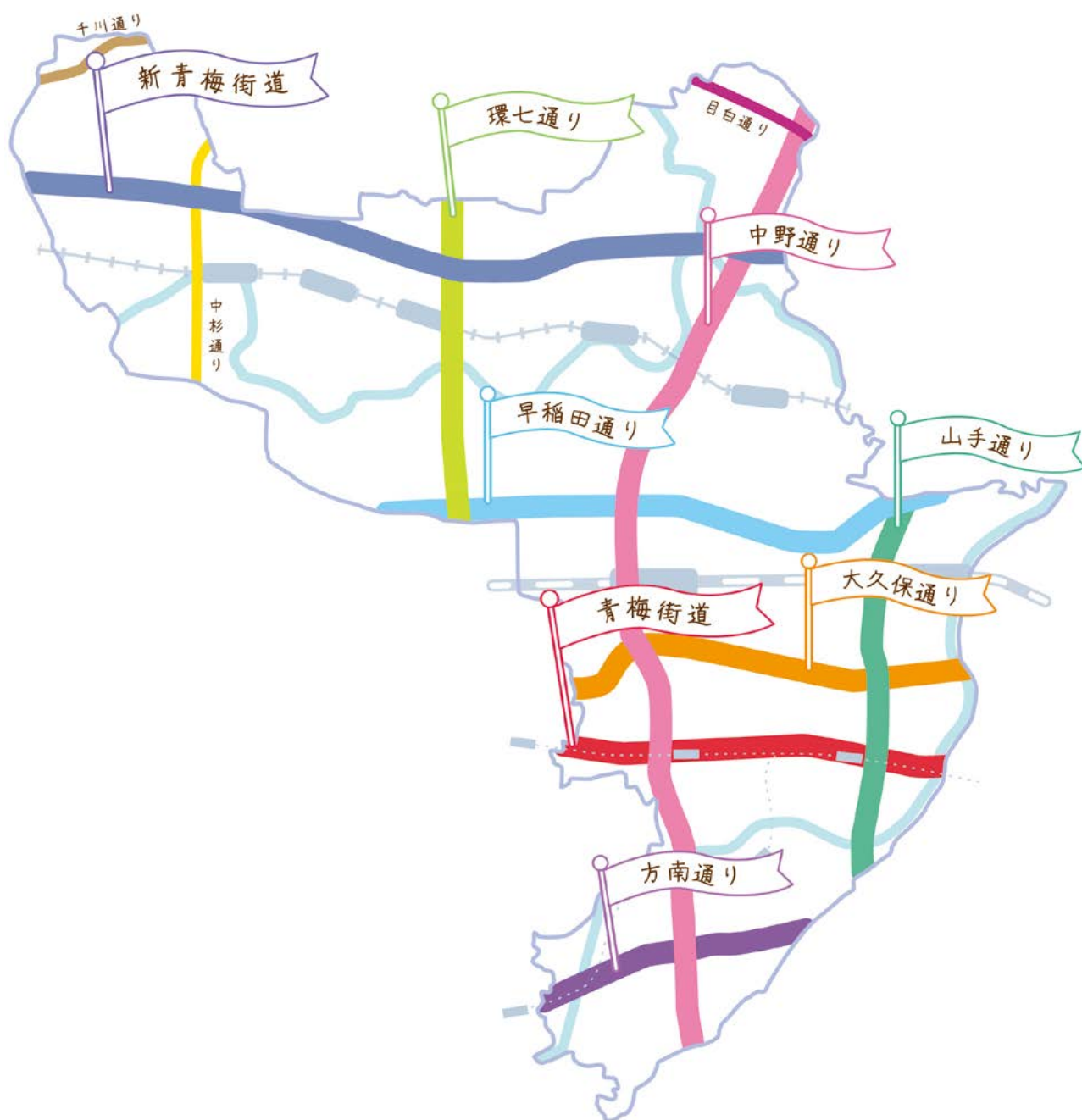
道路についての主な問い合わせ先としては、「道の相談室」が国土交通省、東京都建設局にそれぞれ設置されていますが、こちらは相談室であり調査室ではありません。また、中野区役所にも新宿区・杉並区・中野区を管轄する第三建設事務所が入っているのですが、これも調査機関ではありません。最終的に東京都土木技術支援・人材育成センター（現・東京都土木技術支援センター）にお伺いして写真をお借りすることができましたが、こちらはライブラリーはあるものの一般公開されていません。お借りした写真は図書館のデジタルアーカイブ「でじなか」の写真とともに掲載しておりますのでご覧ください。

この資料が今後の内外の調査の参考になれば幸いです。

中野区立中央図書館 参考・地域行政資料室

も く じ

東京 23 区の道路 ー歴史と名称ー	1
青梅街道	3
中野そばの歴史と青梅街道	7
絵 図 に 見 る 青 梅 街 道	9
山手通り	11
環七通り	15
早稲田通り	19
新青梅街道	23
中野通り	27
大久保通り	31
方南通り	35
千川通り・目白通り・中杉通り	38
中野上空の道	41
展示風景	42
地図	43
参考文献リスト	45



東京 23 区の道路

— 歴史と名称 —

道路には国道、高速道路、農道、林道など様々な種類がある。今回の調査で取り上げる道は、東京都が建設・管理を行う「都道」に認定された道路である。また、都市計画道路として計画された道路でもあり、都道としての名称（路線名）と、都市計画道路としての名称が別々に存在している。それに加えて通称名もつけられており、一つの道路でも、複数の名称がある。3 ページからの各道路解説の冒頭にて、中野区にかかる部分の各名称を列挙する。

東京の近代的な都市計画道路の始まりは、明治時代に遡る。明治 21 年、内務大臣山縣有朋による「東京市区改正条例」が公布され、翌 22 年に日本初の法定都市計画である「東京市区改正設計」が認可された。しかし、財政難により事業の進捗は芳しくないまま、大正 5 年、計画は終息を迎えた。

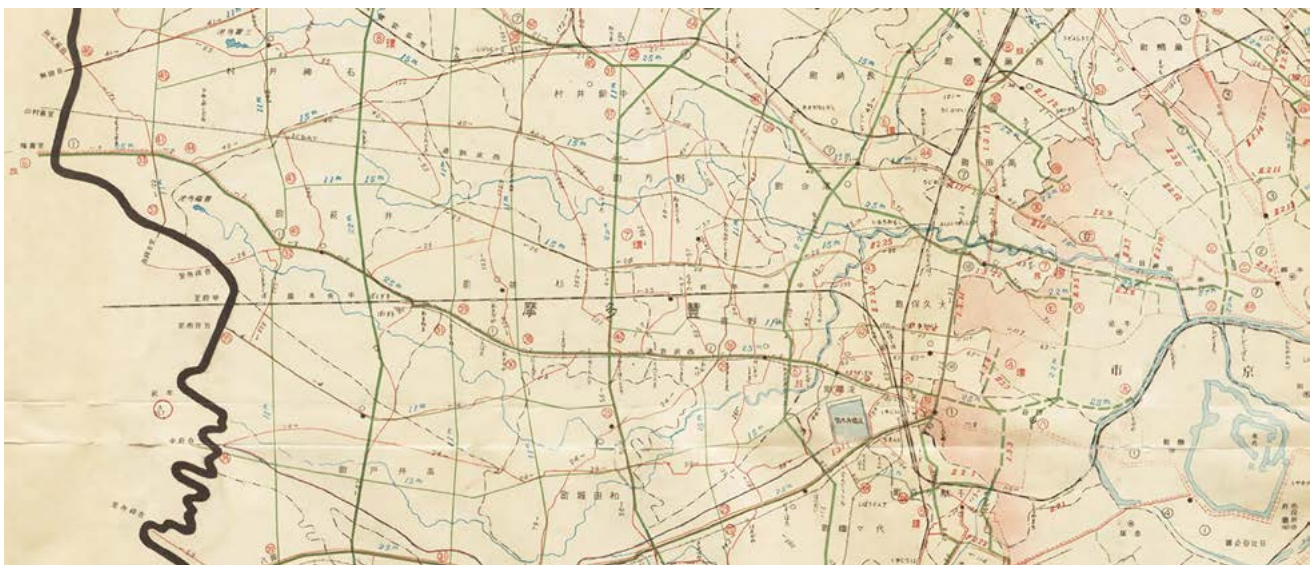
そうした中、幹線道路の拡幅や新設、路面電車の開通など、交通手段が増えたことで市民の行動範囲が拡大すると、改めて都市計画の必要性が叫ばれるようになった。大正 8 年には「都市計画法」が公布、翌年に施行、ほぼ同時期に「道路法」も公布・施行され、道路行政の基礎が固められた。10 年に東京都市計画地図も作成されたが、計画が進む最中の 12 年 9 月、関東大震災が発生。都市計画は震災復興事業として再設定され、国内初

の大々的な都市計画事業となった。昭和 2 年には都市計画道路網が決定し、東京都の都市計画区域全域にわたる初の系統的街路計画となった。

その 18 年後、東京は戦災により約 4,800 万坪が焼失してしまった。政府は既定の都市計画道路網を抜本的に改訂し、昭和 20 年 12 月に「戦災地復興計画」が決定、新たな計画として生まれ変わる事となった。しかし、またも敗戦直後の財政状況から計画通りにはいかず、25 年に都市計画街路は実現可能と思われる規模に縮小した。

27 年、現行の「道路法」が公布・施行され、正式に都道が法定された。加えて、主要地方道の指定、都道の再編成も次々に行われ、58 年まで複数回にわたって整理が進められた。37、38 年には、東京都によって主要道路に通称名がつけられた。39 年開催の東京オリンピックに向けて観光・交通の利便性を鑑み、欧米都市のように分かりやすく親しみやすい道路名が必要だと考えられたためである。

このように、道路行政は震災や戦災を経て複雑な変遷を辿っている。同じ道路でも複数の名称をもつことが大抵で、法律の変更や整備事業により、その都度名称が変わっている場合もある。さらに明治以前の歴史的背景に対する呼称（旧道、廃道、街道など）や地元住民が使う通称名が存在する道路もある。したがって、道路を調査する際は道路名称の変遷に注目すると、ある程度成り立ちの概要が掴めるようになっている。



東京都市計画区域内郡部に於ける国道及府県道並都市計画路線図

出典：『東京府道路概要（東京府土木概要；第 1 分冊）』東京府土木部、1932 年（国立国会図書館デジタルコレクションより一部編集）

都内の道路に関する主なできごと

年月日		主なできごと
明治 2 (1869) 年		全国の関所が廃止される。
明治 6 (1873) 年	8 月	大蔵省から、「河港道路修築規則」が発令。これをもって、全国の道路が 1・2・3 等の 3 種に分けられる。
明治 7 (1874) 年	1 月 10 日	内務省が設立。道路行政を担う。
明治 9 (1876) 年	6 月 8 日	太政官達第 60 号「道路ノ等級ヲ廃シ国道県道里道ヲ定ム」公布。これをもって以前の等級を廃止、新たに国道県道里道の 3 種をそれぞれ 3 等級に分ける (9 月 6 日施行)。
明治 11 (1878) 年	1 月 16 日	東京街路取締規則が制定。
明治 16 (1883) 年	2 月 14 日	東京府が、道路・橋梁修理に関する規定を布達。
明治 18 (1885) 年	2 月 24 日	国道路線 (国道表) を制定し、国道 44 路線を定める。
明治 21 (1888) 年	8 月 16 日	東京市区改正条例公布。
明治 22 (1889) 年	1 月 28 日	東京市区改正設計 (旧設計) が内閣に承認される。道路、河川、橋梁、鉄道、上下水道、公園、火葬場、墓地などに関する整備計画を定めた。
明治 36 (1903) 年	3 月 31 日	東京市区改正新設計が告示される。
大正 8 (1919) 年	4 月 4 日	都市計画法が公布される。
	4 月 11 日	旧道路法が公布される。道路は国道・府県道・郡道・市道・町村道の 5 種に分けられた (郡道は大正 11 年 3 月の改正により廃止)。
大正 10 (1921) 年	5 月 13 日	東京都市計画街路運河事業が決定認可。国で初めての都市計画の決定となる。
大正 12 (1923) 年	12 月 24 日	復興院により、関東大震災の復興計画が策定。特別都市計画法公布。
大正 13 (1924) 年	3 月	特別都市計画法施行令が公布される。 幹線街路 52 路線、補助線街路 122 路線が決定。
大正 14 (1925) 年	10 月 8 日	東京府の環状線および放射線道路計画を決定。
大正 15 (1926) 年	9 月 1 日	指定府県道を指定。
昭和 2 (1927) 年	8 月 18 日	特別都市計画委員会によって、復興計画街路に対応する都市計画道路網が決定。 このときから東京の都市計画道路に放射・環状という名称が使われ始める。
昭和 18 (1943) 年	7 月 1 日	東京都制施行により、府県道と市道が東京都の管理になる。
昭和 20 (1945) 年	11 月 5 日	戦災復興院が設置される。
	11 月 30 日	戦災復興計画基本方針が閣議決定される。
昭和 21 (1946) 年	3 月 26 日	都市計画道路の幹線道路が、戦災復興院告示第 3 号にて告示。
	4 月 25 日	都市計画道路の補助線道路が、戦災復興院告示第 15 号にて告示。
	9 月 11 日	特別都市計画法が公布される。
昭和 22 (1947) 年	8 月 14 日	東京都内の道路工事復活。
昭和 23 (1948) 年	7 月 10 日	内務省が解体され建設省が発足。道路行政の中核を担う。
	12 月 29 日	道路の修繕に関する法律が公布される (翌年 3 月施行)。
昭和 25 (1950) 年	3 月 31 日	道路標識令が公布される。
昭和 27 (1952) 年	6 月 10 日	現行の道路法が公布される (12 月 4 日施行)。
昭和 29 (1954) 年	1 月 20 日	新道路法に基づき、主要な地方道が指定される (昭和 57 年まで 5 回にわたって行われる)。
昭和 31 (1956) 年	3 月 14 日	道路整備特別措置法が公布される。
昭和 32 (1957) 年	4 月 25 日	高速自動車国道法が公布される。
昭和 34 (1959) 年	6 月 17 日	首都高速道路公団が発足。
昭和 37 (1962) 年	4 月 25 日	東京都によって道路の通称名が新たに設定される。
	6 月 12 日	オリンピック道路を特定公共事業として認定。
	12 月 20 日	首都高速 1 号線芝海岸～桜橋間開通。
昭和 38 (1963) 年	6 月 18 日	東京都によって道路の通称名が新たに設定される。
昭和 41 (1966) 年	4 月 1 日	都道の再編成が行われ、都道の整理番号が変更される。
昭和 44 (1969) 年	6 月 14 日	現行の都市計画法が施行される。
昭和 46 (1971) 年	11 月	都道府県道番号標識 (通称・ヘキサ) が制定される。
昭和 59 (1984) 年	5 月 1 日	東京都によって道路の通称名が新たに設定、一部経路の変更がなされる。
平成 10 (1998) 年	5 月 29 日	都市計画法改正。
平成 13 (2001) 年	1 月 6 日	国土交通省の設立。

青梅街道

都道 4 号東京所沢線／ 5 号新宿青梅線
都市計画道路 幹線街路放射第 6 号

西新宿 1 丁目大ガード下付近から、奥多摩町の鴨沢橋付近にある山梨県との県境までの約 78 km の街道。中野区内の青梅街道は、新宿区との境目である淀橋より西進し、中央 5 丁目・本町 6 丁目に到る約 2.2km の道である。

青梅街道は道筋やその役割により名称が多数存在する。江戸時代には青梅街道の正式な呼称はなく、江戸に向う道を「江戸道」「小川道」「箱根ヶ崎道」、青梅や奥多摩に向う道は「あふめ道」「みたけミチ」「日原・くら沢・ひ川・ゆバ・た婆山ミチ」などと記録されている。

内藤新宿の途中から甲州街道と分岐する青梅街道は、角筈村・柏木村・中野村・荻窪・田無を経由して青梅村に達し、多摩川に沿って山路を経て甲州に達する。同じく甲州に通じる甲州街道と

は違い、大名が参勤交代で使用する道ではないため、甲州道中の関所や口留番所（^{くちどめばんしよ}どちらも旅人の出入りや荷物を調べる役所）を避けることができ、道も 2 里（約 8km）ほど短くなる。そのため、甲州への近道ということで利用する旅人も多く、青梅街道は甲州街道の脇往還（^{わきおうかん}脇街道）、甲州裏街道とも呼ばれた。

石灰の道として発達

近世初期、江戸城の増改築用に漆喰壁（白壁）材として大量の消石灰が必要となる。多摩地域の代官頭である大久保長安が石灰の上納を命じられたことから、八王子石灰（^{なりき}成木石灰）の生産が幕府の援助のもと本格化した。成木川の上流から石灰岩を採取する成木村や、北小曾木村、^{きたおそき}上直竹村などで生産された八王子石灰が江戸幕府ご用達の「御用石灰」となり、特権的待遇を受けた。搬出経路として青梅から江戸へと通じる青梅街道の街道整備が始まり、「あくつけ（^{おはくど}悪付街道）」「成木街道」「御白土街道」とも呼ばれた。

石灰を塗った白色の漆喰壁は、見た目の美しさだけでなく防火壁として機能し、火事による損失の多い江戸で重宝された。石灰は江戸の他にも日光東照宮や名古屋城・二条城・大阪城などの白壁



中野村絵図。東西をまっすぐ貫いている道が、青梅街道。沿道には宝仙寺や五重塔などが描かれている。

所蔵：東京都立大学図書館本館 堀江家文書 S8 トリミング

材として使用され、近世初期の江戸石灰市場はほぼ八王子石灰の独占状態だったが、中期以降は「野州石灰」「江戸^{やしゅう}蛎殻灰^{かきがら}」なども使われるようになった。また、19世紀後半には漆喰や染色、製造業など都市での消耗品としてだけでなく、肥料として農村でも利用された。

道の役割の変化

青梅街道を利用する経路が八王子石灰の唯一の江戸への出荷経路であったが、新河岸川舟運が開発されると、以降は舟運と並存した。陸送経路が完全に無くならなかったのは、水に弱い石灰の品質維持や、臨時の発注に応えるには陸路の方が便利だったためと考えられている。しかし、寛政年間にはすべて舟運になった。

石灰が運ばれなくなった後は、青梅街道における公用輸送は減少したものの、江戸幕府の役人の往来などで機能し続けた。また、多摩山間部や武蔵野の諸村と江戸を結ぶ商品輸送路として発展していき、日原^{にっばら}（現・奥多摩町）の一石山大権現^{いっせきさんだいごんげん}や武州御嶽神社への信仰が盛んになると、行者や参詣人によって賑わったのである。

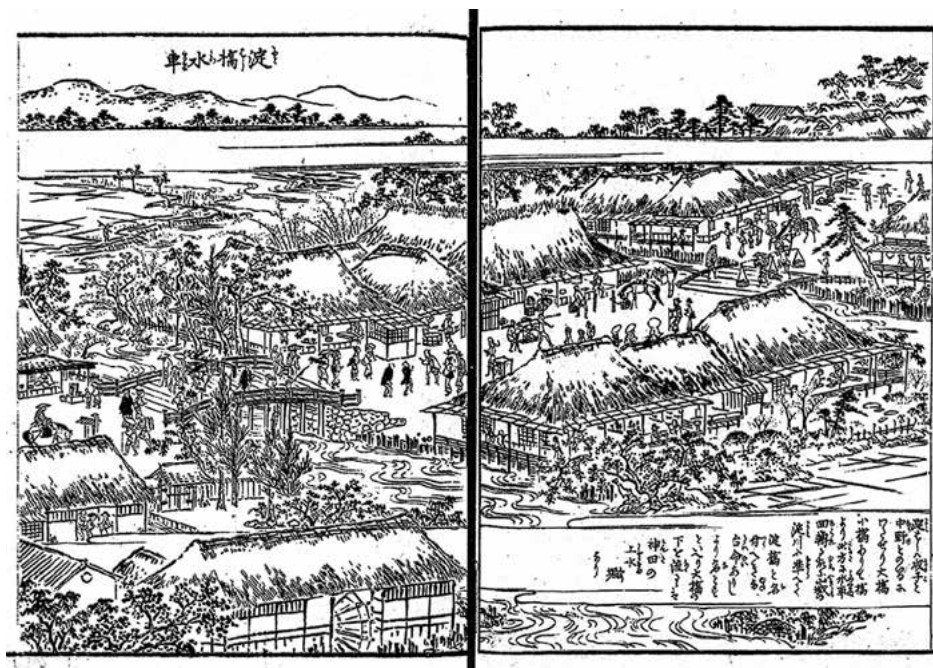
中野村の発展・助郷制度^{すけごう}

石灰輸送のために青梅街道が整備されると、青梅街道の第一宿駅である中野宿ができた。宿駅とは街道の要所であり、旅人の宿泊や、荷物運搬の人馬を中継ぎする設備のあった場所で、江戸日本橋から2里半（約10km）の中野村は、休憩地としてちょうど良かった。

東の淀橋に始まり、西の鍋屋横丁の先まで、宿場を上・中・下の3つに分けて問屋場が置かれ、人馬の継立^{つぎたて}が行われた。『新編武蔵風土記稿』では「家数三四五軒」とあり、ここが中心となり中野村が形成されていく。船運が発達し、八王子石灰の輸送終了後も、中野宿は地方から江戸中心地への物流集積地としての役割や、周辺寺院への参拝道として発展を続けた。

寺院参詣・鍋屋横丁の名物たち

江戸時代、堀之内妙法寺へ参詣する人々は青梅街道を利用し、鍋屋横丁を折れて寺へと向かった。妙法寺は杉並区堀之内にある日蓮宗の本山で、厄除けにご利益がある寺院として知られていた。『武蔵名勝図会』には、「土産物 水飴。麦粉菓子。柿。新蕎麦粉。この品々は中野、淀橋、鳴子辺の家にて商う。参詣の輩、家づととなせり」



江戸後期、淀橋の様子。

出典：『江戸名所図会 十一』 斎藤長秋 / 編，長谷川雪旦 / 画，博文館，1893年
(国立国会図書館デジタルコレクションより転載)



鍋屋横丁記念碑。
写真：職員撮影

と中野の名物が列挙される。中でも妙法寺参詣の土産として有名だったのが、武蔵坊弁慶が力餅を食べたという伝説から屋号を取った「弁慶」という菓子屋の水飴と、「大団子」という団子屋の焼団子であった。界限では他にも料亭「かどや」と呉服屋「阿波屋」も有名であった。

鍋屋横丁は水茶屋や料亭などが立ち並び賑わっており、名前の由来となった鍋屋は、名物の草餅や200株以上の梅林があったことで有名な休み茶屋で、明治頃まで存在していた。鍋屋の繁栄ぶりは文久2年に奉獻された東中野氷川神社の鳥居や、「ほりのうちへ十八丁十間」と妙法寺までの距離が刻まれた明治11年建立の道標などに偲ばれる。妙法寺以外にも新井薬師や宝仙寺などの参詣客も往来し、参拝の道として青梅街道はおおいに賑わった。



大正10年、鍋横商店街の文具店。
出典：でじなち ちいきの写真と図書のアーカイブ

明治以降の青梅街道と中野

明治維新後も中野の青梅街道沿いは、味噌や醤油の生産、製粉業が盛んで活気ある地域であった。明治初期、青梅街道は府県道に定められ、大正9年に旧道路法が施行されると、青梅街道は「東京府道第2号 東京青梅線」との名前で認定された。この時点では、青梅街道は中野を走る道としては唯一の府県道であった。

明治7年「青梅街道取調帳」によると、中野村におけるこの街道の幅は約4間(約7m)となっている。大正9年には10間(約18m)に拡張する計画が立てられたが、予算などの問題で着手が先延ばしになっていた。関東大震災後、中野の人口が増えると共に、青梅街道の交通量も増えていく。しかし淀橋から西側は依然狭いままで、そこを電車や自動車、牛馬車などが通っていたため事故も多く、「危険道路」と言われていたとい



昭和6年、放射6号線沿道の家屋移転中。杉並町中野町界付近より東方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



現在の青梅街道。宝仙寺入口付近より西方。
写真：職員撮影

昭和6年、放射6号線工事中。中野郵便局付近より西方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター

う。そのため、住民や西武鉄道によって工事を早く行うよう陳情が出された。その後、昭和4年から6年にかけて拡築工事が行われ、13間5分（約24.5m）の道路となった。この工事では青梅街道に歩道と街灯も設置された。歩道には、土日になると夜店が出て賑わったという。

戦後、青梅街道の道幅は30～38mとさらに大きく拡張され、現在では1日約3万台以上の自動車が走っている。

明治以降の交通と運輸

明治22年、中野村は本郷村・本郷新田村・雑色村を併合、更に8年後の明治30年には中野町と改まる。合併時の明治22年4月、新宿立川間に甲武鉄道（現・JR中央総武線）が開通し、中野に停車場ができると、町の中心地は徐々に青梅街道周辺から鉄道周辺へと移っていった。当初、中野停車場付近は人家が少ない原野であったので、鉄道を敷設するならば青梅街道沿いが適切と考えられたが、青梅街道筋の住人が「客を取られる」、「汽車の煤煙が野菜を害し、火の粉が藁屋根を焼く」と鉄道の敷設に消極的であったために、実現しなかった。

甲武鉄道の敷設によって町の賑わいが中野駅周辺に移ってしまったことを受け、大正10年8月、路面電車である西武軌道が青梅街道に敷設される際の土地買収は順調に行われた。西武軌道の経営会社は次々と変わり、吸収合併も行われ、翌大正11年に西武鉄道に改称。戦後、昭和26年に経営が東京都に譲渡され、都電として走り続けた。区内には最初、淀橋、住友銀行前、宝仙寺前、中野警察署前、中野銀行前、登記所前、鍋屋横丁、追分、西町の9つの停留所がつけられた。東京都の経営になってからは、本町通二丁目、本町通三丁目、鍋屋横丁、本町通六丁目の4か所であった。最盛期には、1日に5万人以上の乗客を記録したという。

ところが、高度経済成長期が訪れ車中心の社会になると、路面電車は交通渋滞の元凶と言われるようになり、都は都電全線廃止を決定。青梅街道を走っていた都電杉並線は、営団地下鉄荻窪線（現・東京メトロ丸ノ内線）と競合関係になるこ



昭和6年、放射6号家屋移転中。追分付近より西方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和38年、青梅街道・鍋横付近にて都電杉並線の廃止
出典：でじな ちいきの写真と図書のアーカイブ

とも併せて、昭和38年12月1日に都電廃止第一号となりその幕を閉じた。

青梅街道では地下鉄と共にバスも重要な交通手段である。大正12年の関東大震災で路面電車の軌道が寸断されてしまい、移動手段の応急措置として大正13年1月18日、東京市電気局による乗合バスが登場した。これ以降、中野にバスが普及し、昭和4年には複数社のバスが走るようになった。現在中野区内には関東バス、都営バス、京王バスが走り、近隣住民の足となっている。

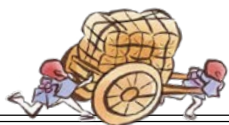
東京オリンピックと青梅街道

戦後、東京オリンピックの開催に向けて道路の整備が進められた。昭和 39 年には青梅街道の舗装工事が行われ、車道の部分は厚さ 33cm から 52cm のアスファルト舗装となり、都電が走っていた軌道も修正され、でこぼこしていた道がきれいにならされた。また、鍋屋横丁を中心としてガードレール 800 m を新しく取り付け、スズカケ、イチヨウなどの街路樹 482 本の植樹、センターラインや横断歩道に標識びょうを設置する整備工事が行われた。青梅街道は聖火リレーのコースとしても選ばれ、10 月 9 日には武蔵野市を出発した第一コースの聖火リレーは、雨上がりの青梅街道を走り、午後 1 時 12 分には東京都庁に到着。他のコースを走った聖火と皇居二重橋前で行われた集火式で合火された。



昭和 39 年、オリンピックの聖火ランナー。

出典：でじな ちいきの写真と図書のアーカイブ



中野そばの歴史と青梅街道



「そば」は江戸時代から大変人気があり、武士や庶民の身分を問わず親しまれてきた。

江戸時代の「中野宿」は、江戸に向かう最後の宿場町にあたり、青梅街道から運ばれてきた米穀物を含むほぼ全ての物資がそこに集荷され、江戸の業者へ供給する拠点となっていた。また、『商店街からたどる“なかの”の足跡 PART 2』によると、当時の中野一帯は、「物資が運ばれるだけでなく、中野の土地自体が、大豆・そば・小麦などを生産する畑作地帯」だったという。『改訂新版 蕎麦辞典』にも、江戸時代から大正初期までの中野桃園あたりでは蕎麦畑が見られたとの記述があり、中野の立地は地理的にも生産地と消費地の間に位置していたことがわかる。

このことから、「中野はそばの生産で有名で

あり、江戸町内で消費されるそばのほとんどは「中野そば」と呼ばれて名産だった」と、『中央線がなかったら 見えてくる東京の古層』に紹介されている。

麦やそばなどを脱穀し、そば店に供給する仕事を「ぬき屋」と呼び、特に、中野の「ぬき屋」は有名で、江戸のそば店の製粉原料の大半を供給していたとの記述が、『中野町誌 全』に見られる。当時は、神田川を利用した淀橋水車の動力でそば粉を挽き製粉していた。現在もその名残として、青梅街道沿いの石森製粉所前には、大石臼が飾られている。

浅田蕎麦製粉所（寛政年間創立）をはじめとして、飯田製粉所（文久 2）、石森製粉所（明治 5）、高野製粉所（明治 8）、栗原製粉所（大正 1）が、中野の 5 大製粉所といわれる。

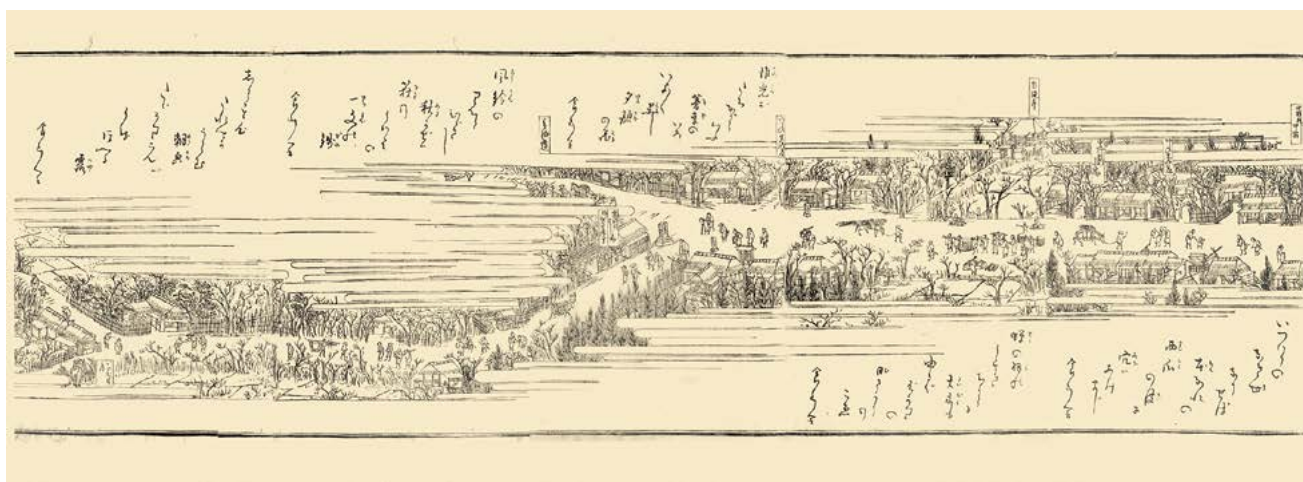
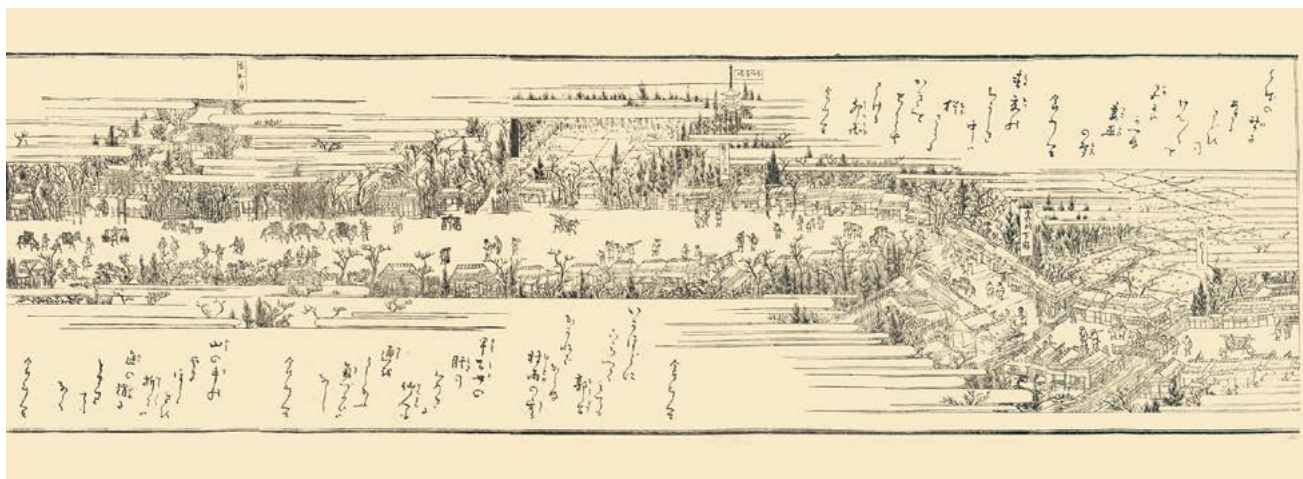
年表

年月日		できごと
天正 18（1590）年	8 月 1 日	徳川家康が江戸城に入城する。
慶長 11（1606）年		江戸城の増改築により漆喰壁の材料として消石灰が必要となる。多摩地域の代官頭に対し、幕府が石灰の上納を命じ、八王子石灰が幕府の援助のもと生産が本格化。「御用石灰」となり、搬出経路として成木往還（青梅街道）の街道整備が始まる。
元和 2（1616）年		青梅新町の完成。成木方面からの物資が岩蔵で分岐して青梅新町村を迂回し、宗安塚を経て、箱根ヶ崎に向かう道筋ができあがる。
慶安 2-3（1649-50）年		『武蔵田園簿』に青梅街道についての記録あり（確認できる最も古い記録）。
明暦年間（1655-58 年）		田無と箱根ヶ崎の中間に小川村が成立。道筋は田無の橋場で当初の青梅街道から分岐し、小川村を通り、残堀を経て箱根ヶ崎に向かう経路が頻繁に使用されるようになる。
元禄年間（1688-1704 年）		奥多摩町数馬の切通の開削。
宝永 4（1707）年		新河岸川舟運が開発され、八王子石灰は陸送経路と舟運で運ばれることになる。
寛政（1789-1800）年頃		御用石灰の輸送手段がすべて舟運になる。
明治 6（1873）年	8 月	国の河港道路修築規則を以て、全国の道路が 1・2・3 等の 3 種に分けられる。青梅街道は 2 等道路。
明治 10（1877）年	1 月 20 日	東京府により、青梅街道は県道 3 等と定められる。
明治 11（1878）年		大菩薩峠迂回路（柳沢峠）の完成。
明治 13-19（1880-86）年		迅速測図上で府県道として描かれているのが確認できる。「原江戸道」が青梅街道と記される。同時代、『皇国地誌』では「東京街道」「東京甲州脇往還」と記されている。
大正 6（1917）年		東京府は主要道路開設のため、6 線を選びその改修を大正 7 ～ 10 年にかけての事業として府会に提出する。青梅街道は古里村から氷川村梅澤に至る幅 2 間半、長さ 662 間。
大正 9（1920）年	4 月 1 日	道路法施行に基づき、東京府告示第 162 号で「東京府道第 2 号 東京青梅線」と認定。
大正 10（1921）年		西武軌道株式会社の経営で、路面電車の新宿荻窪線が開通。
大正 14（1925）年		青梅街道拡幅工事。この際淀橋が鉄筋コンクリートの橋に改築される。
昭和 2（1927）年	8 月 18 日	特別都市計画委員会によって、復興計画道路に対応する道路網計画を決定。「豊多摩郡淀橋町淀橋東詰」から「北豊島郡石神井村大字関北多摩郡界」までの区間が幹線放射 6 号線と設定される。
昭和 4（1929）年	12 月	青梅街道第 1 回拡築。淀橋西詰めより、中野郵便局に至る区間の改修竣工。
昭和 5（1930）年	3 月	青梅街道第 2 回拡築。中野郵便局より、追分に至る区間の改修着手。
昭和 6（1931）年	10 月	追分より、杉並町境に至る区間の改修着手。
昭和 13（1938）年		新宿荻窪線が東京市交通局の委託経営となる。
		内務省都市計画東京地方委員会にて、二階式の高速自動車専用道路が計画される。青梅街道も予定路線として名前があがる。
昭和 20-35（1945-60）年頃		多摩飛行場（現・横田基地）が拡張。初期の青梅街道（現・原江戸道）の一部が消失。
昭和 21（1946）年	3 月 26 日	戦災復興院告示 3 号により、都市計画道路「放射街路 6 号線」となる。
昭和 25（1950）年	3 月 2 日	幅員を 30 ～ 38 m に変更することが決定。
	12 月	新宿荻窪線が東京都直営となる。
昭和 29（1954）年	1 月	新道路法に基づき、主要な地方道が指定される。東京所沢線と、東京青梅線の一部が青梅街道に該当する路線。
昭和 30（1955）年	12 月 15 日	前年、主要地方道として指定された路線が、東京所沢線は都道 2 号東京所沢線に、東京青梅線は都道 6 号新宿青梅線として認定される（2、6 号線は田無まで重用）。
昭和 32（1957）年		小河内ダム完成。青梅街道の一部消失。
昭和 36（1961）年		帝都高速度交通営団の経営で、地下鉄荻窪線（現・丸の内線）が開通。まず新宿～新中野間、分岐線の中野坂上～中野富士見町間が開通。
昭和 37（1962）年		地下鉄荻窪線、新宿～荻窪間が開通。分岐線の中野坂上～方南町間が延長開通。
	4 月 25 日	東京都によって新宿区角筈 2 丁目から西多摩郡奥多摩町（鴨沢橋）までの区間の通称名が「青梅街道」と設定される。
昭和 38（1963）年		都電杉並線廃止。
昭和 39（1964）年	1 月 21 日	夜から本舗装始まる。新宿、杉並、中野 3 区と都交通局で一斉に作業にあたる。4 月下旬に区内区間の舗装工事完了。
昭和 41（1966）年	4 月 1 日	都道の再編成が行われ、都道の整理番号が変更される。2 号東京所沢線は 4 号、6 号新宿青梅線は 5 号、7 号甲府青梅線は 6 号へ変更。
昭和 49-55（1974-80）年度		都道 5 号新宿青梅線と西武鉄道拝島線との立体交差化工事着手～全事業完了。
昭和 57（1982）年		都道 6 号線から国道 411 号線に変更。
昭和 59（1984）年		昭和 37 年に決定した通称「青梅街道」の一部経路（青梅市野上 3 丁目から青梅まで）が変更になる。

絵図に見る青梅街道

江戸時代の青梅街道の様子は、いくつかの絵図や浮世絵などに描かれ記録されている。しかし、中野区内の他の地域は、ほぼ田畑や原野だったため絵図や地図などの記録はほとんど残っていない。現存する史料の量からみても、青梅街道周辺の地域が中野区内で最も栄えた場所だったことがわかる。

ここでは、青梅街道の当時の様子を伝えている史料を紹介する。



ほりのうちみょうほうじき

堀之内妙法寺記

玉泉斎春山（藤原好成）／筆

年代：不明

所蔵：中野区立歴史民俗資料館

※この図は、中野区内の部分を繋ぎ合わせて編集したものです。

『堀之内妙法寺記』には、内藤新宿から堀之内の妙法寺に至るまでの参詣道が描かれている。

絵図からは人馬が行き交い、沿道には商店などが立ち並び賑わっている様子がわかる。また、「宝仙寺」や「自現寺（慈眼寺）」、「なべや横丁」など、現在も青梅街道沿いに残る寺社や要衝も見える。



えどじつそくず
江戸実測図（南）

伊能忠敬 / 筆

年代：文化 14（1817）年

所蔵：国土地理院

※この図は、絵図のうち中野地域のみをトリミングしたものです。

『江戸実測図』（江戸府内実測図とも言う）は、実測で初めて日本地図を作成したことで有名な、伊能忠敬の晩年の仕事である。

現在の中野区周辺に残る「青梅街道」や「鍋屋横丁」「淀橋」が描かれているほか、余白の多さから当時は田園風景が広がる郊外だったことがうかがえる。



えどじまんさんじゅうろつきょう ほりのうちよど みずあめ
江戸自慢三十六興 堀之内淀はし水飴

喜翁豊國（年玉杵）、廣重 / 筆

年代：元治元・文久 4（1864）年

所蔵：東京都立中央図書館

3代歌川豊国が人物景物を、背景の風景を2代歌川広重が描いた大錦絵三十六枚揃いのうちの1枚。

青梅街道は、杉並区堀ノ内の妙法寺への参道としても栄えた。参詣の土産として、鍋屋横丁や中野坂上にあった菓子屋の水飴や焼き団子が有名であったと言われている。

やまてどおり 山手通り

都道第317号 環状6号線

都市計画道路 幹線街路環状第6号線

「山手通り」は昭和37年に決定した通称名で、環状6号線とも呼ばれる。品川区東品川1丁目新東海橋交差点から、板橋区氷川町仲宿交差点までの約20kmを繋ぐ環状道路で、地下にはほぼ全区間にわたり、日本一長いトンネルである「山手トンネル」が走る。

道の原形は江戸時代に存在していたと考えられ、文化3(1806)年の「中山道分間延絵図」^{なかせんどうぶんけんのべえず}の板橋宿の仲宿付近に「山ノ手辺道筋」と記された、雑司ヶ谷、高田馬場方面と中山道を繋ぐ枝道が確認できる。

また山手通りの「山手」は、江戸前期から東京の高台地帯の地名として用いられるようになった「山の手」が由来すると思われる。当時は四ッ谷、青山、市ヶ谷、小石川、本郷付近を山の手と呼び、多くの武家屋敷が存在した地域であった。明治期の山の手範囲もおおよそ変化はなかったが、大正12年の関東大震災を契機に、郊外へ住宅地が拡大したことにより、その範囲は中野、杉並、目

黒、渋谷、世田谷区周辺にまで広がったという。

都市計画道路としての山手通り（環状6号線）

古くから原形が一部存在すると思われる山手通りだが、都市計画道路として整備計画に初めて登場するのは、大正10年の「東京都市計画地図」である。『東京府史』記載の「府知事執行街路（環状線）」に照らし合わせると、幅員12mの1等3類8号、1等3類9号路線として設定され、現在の目黒区大橋付近以南まで計画されていることがわかる。こうした中、12年に関東大震災が発生、下町を中心に旧東京市の面積の4割以上が焼失するという、未曾有の大災害が起きてしまう。都市計画も大打撃を被ったが、先にも述べた通り、震災をきっかけに下町から郊外への移住が進んだことを受け、新たに計画区域全域（現在のほぼ23区に相当）に都市計画道路が設定されることになった。それが、昭和2年の東京特別都市計画委員会による「都市計画道路網」である。『東京府史』によると、山手通りは当初「幹線環状道路六ノ一」として計画され、区間は「豊多摩郡渋谷町下渋谷ヨリ北豊島郡板橋町下板橋二至ル」、幅員は22mと定められている。なお、全区間の道路を新設するわけではなく、すでにある道路を活用し、足りない部分のみ新設する方向で計画は進められた。

またこの計画では「幹線環状道路六ノ二」が存在しており、区間は「南足立郡千住町中組国道四



昭和14年、環状6号線工事中。
塔ノ山町(現・中央1丁目、2丁目)付近
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和16年、環状6号線竣工。
塔ノ山町(現・中央1丁目、2丁目)付近
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



山手通り（環状6号線）計画前の、現・中野区南東部付近。
出典：国土地理院発行1万分の1地形図「中野」明治42年



山手通り完成後の中野区南東部付近。地図中央を大きな道が南北に縦断している。
出典：国土地理院発行1万分の1地形図「中野」昭和31年

号路線ヨリ南葛飾郡砂町本町二至ル」とある（『東京府史』）。現在は都心の西側にしか存在しない山手通りだが、当初は現在の環状7号線（環七通り）のように、東側もカバーする環状道路として計画されていたことがわかる。

区内区間の道路完成過程を、当時の中野区の地図や写真で確認すると、南側から道路が出来上がっていく様子が確認できる。昭和8年時点では渋谷区との境から青梅街道まで、14年に塔ノ山町（現・中央1丁目、2丁目）、16年の地図ではすでに区内の区間が開通している。しかし戦争の激化により、事業はまたも頓挫してしまう。

戦後の復興計画と全線開通

昭和20年8月15日に終戦を迎えたものの、都市部の空襲による被害は甚大なものであった。特に東京は区部のほぼ全域が罹災しており、その罹災面積は区部総面積の3割に及んだ。こうした都市の荒廃を鑑み、戦災復興計画の検討は終戦前から開始された。終戦の同年12月には「戦災地復興計画基本方針」が決定し、翌21年、規定の都市計画事業は壮大な構想のもと「東京都戦災

復興都市計画」として設定し直された。山手通りは同年3月26日の「戦災復興院告示第3号」で、環状街路路線番号6、起点を品川区大井南浜川町（現・南大井1丁目・4丁目）、終点は板橋区板橋町5丁目（現・板橋1丁目～4丁目）と定められた。加えて、道路の幅員を今までの22mから80mへ大幅に拡幅する計画が立てられた。しかし、敗戦直後の財政状況では事業の進捗は芳しくなく、25年に“実現可能”と思われる計画へ見直される。その結果、計画幅員は40mに縮小、なし崩し的に拡幅工事は長年手つかずとなった。

幅員80mの巨大街路築造とはならなかったが、開通工事はその後も進められた。そして終戦から19年後、東京オリンピックが迫った39年8月12日に、最後の未開通区間であった目黒区上目黒8丁目（現・青葉台3丁目・4丁目、大橋1丁目・2丁目）から渋谷区^{しょうとう}松濤町（現・松濤1丁目、神山町）がつながり、晴れて全線開通となった。

平成の拡幅整備事業

復興都市計画見直しの約 40 年後、平成 3 年 3 月と平成 6 年 3 月の首都高速中央環状新宿線の都市計画決定と共に山手通りの拡幅整備がようやく事業化されることになった。区間は豊島区要町 1 丁目から渋谷区松濤 2 丁目間約 8.8km で、そのうち中野区内延長は約 2.3km。計画幅員 40 m・往復 6 車線で整備する方針が 11 年に固まった。しかし、当時の環境への意識の高まりから、住民による認可取消請求訴訟や公害調停が提起され、自動車交通だけでなく歩行者や自転車にも配慮した道路整備へ転換する運びとなった。最終的に、環境への影響を考慮した 4 車線での整備が 14 年 11 月に決定した。すでに事業決定から 10 年以上が経過しており、途中で車線数を変更することは異例の事態であった。

区内の整備は、早稲田通りから南側約 200 m と大久保通りを挟んだ南北約 200 m の街路先行整備区間を対象に、平成 13 年に始まった。山手通りの沿道はマンションや業務用のビルが多いため停車需要も多く、整備前は駐車車両によって実質片側 1 車線になってしまう区間が存在していた。また、左折レーンが存在せず、右折レーンも十分な長さを確保できていなかったため、直進車両の通行の妨げとなっていた。こうした現状を受け、全線で停車帯を設け、交通量を予測した適切な右折レーンを設置するなどの対策が講じられた。

歩道の整備については、地元住民の意見を取り入れるため、地元住民、東京都、首都高速道路株式会社及び区で構成する「意見交換会」が開かれ

た。意見交換会を経て、整備の基本的な考え方となった「緑豊かな沿道環境に配慮した道路づくり」「歩行者に配慮した道路のバリアフリー化」をもとに、両側の歩道と中央分離帯に街路樹を植栽し、広い歩道幅員の確保、全線での自転車通行帯設置、無電柱化が図られ、安全で快適な歩道空間が実現した。中野区議会建設委員会の資料を見ると、17 年 4 月の意見交換会にて、中野坂上交差点でのビル風の対策として、植栽の間隔を工夫することが確認されている。こうした地元との連携により、都心でありながら利用者にとってゆとりのある道路となった山手通りは、中野坂上付近が完成した 23 年 3 月に区内整備が完了、25 年に約 8.8 k m 全区間の整備が完了した。

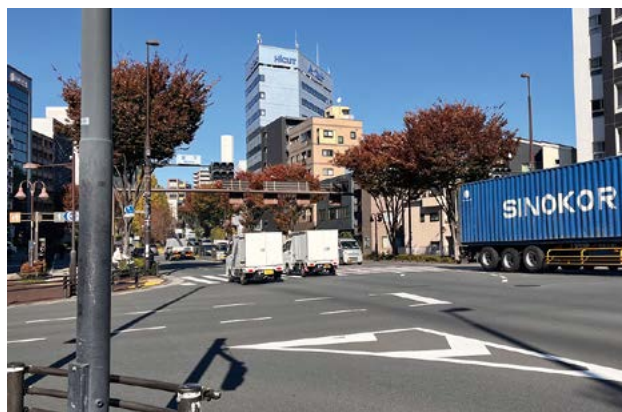
近年の上記区間以外の整備事業については、令和 6 年 12 月に目黒区上目黒 1 丁目～同区青葉台 2 丁目間の事業が完了し、それまで約 23m だった幅員が 30 ～ 35 m に拡幅した。そしてこの事業完了をもって、約 23 年間にわたる山手通り全線の整備が完了した。



昭和 37 年、早稲田通りと環状 6 号線の交差点。
出典：でじなち ちいきの写真と図書のアーカイブ



昭和 45 年頃、環状 6 号線 宮下橋付近（宮下交差点を南から撮影）。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



現在の山手通り宮下交差点。
写真：職員撮影

年表

年月日		内容
大正 10（1921）年		東京都市計画地図が作成される。 当時の東京市十五区の外側を囲む形で、現在の明治通りや山手通りの大橋付近以南が計画路線として記される。
昭和 2（1927）年	8 月 18 日	東京特別都市計画委員会が計画区域全域（現在の 23 区に相当）に対する都市計画道路網を告示。 このときから東京の都市計画道路に放射・環状という名称が使われ始める。 山手通りは幹線環状道路六ノ一として、幅員 22 m で計画されている。
昭和 8（1933）年頃		昭和 8 年発行の『中野区全域図』（通称・火災保険特殊地図）を見ると、中野区内南部～青梅街道まで完成していることがわかる。
昭和 14（1939）年頃		塔ノ山町（現・中央 1 丁目、2 丁目）付近まで完成。
昭和 16（1941）年頃		中野区内開通。
昭和 21（1946）年	3 月	東京戦災復興のための「東京都戦災復興都市計画」が決定、計画道路の幅員が大幅に拡大した。 山手通りは環状街路 6 号線として計画される（幅員 80 m）。
昭和 24（1949）年	6 月	GHQ の経済顧問であるドッジがインフレを収束させるための経済政策（ドッジライン）を提案。 「戦災復興都市計画の再検討に関する基本方針」が閣議決定。事業が大幅に縮小される。
	8 月	アメリカのシャウプ税制調査団が日本の税財政・地方自治制度について勧告を行う（シャウプ勧告）。
昭和 25（1950）年	3 月	シャウプ勧告を受け、戦災復興都市計画が見直される。路線数、延長等には大きな変化はなかったが計画面積が 30% 減少。計画幅員が 40m に改められる。
昭和 30（1955）年	12 月 15 日	都道 26 号品川落合赤羽線に認定。
昭和 37（1962）年	4 月 25 日	道路通称名が「山手通り」に正式決定。
昭和 39（1964）年	8 月 12 日	途切れていた目黒区上目黒～渋谷区松濤間が完成し、午前 0 時に全線開通。
	12 月 28 日	品川落合赤羽線の一部が主要地方道品川落合板橋線に指定。
昭和 40（1965）年	4 月 1 日	一部区間が都道 418 号北品川四ツ谷線に認定（起点：品川区北品川 3 丁目 終点：新宿区花園町）。
	10 月 9 日	都道 309 号品川落合板橋線に認定（起点：品川区北品川 3 丁目 終点：板橋区氷川町）。
		都道 26 号品川落合赤羽線が廃止。
昭和 45（1970）年	4 月 13 日	都道 317 号環状六号線に認定（起点：品川区東品川 2 丁目 終点：板橋区氷川町）。
昭和 46（1971）年	6 月 26 日	主要地方道環状六号線に指定。
昭和 54（1979）年	8 月 10 日	起点を品川区北品川 3 丁目に変更。
		都道 309 号品川落合板橋線が廃止。
昭和 59（1984）年	5 月 1 日	起点を品川区東品川 1 丁目に変更、目黒区中目黒 1 丁目から渋谷区神泉町まで経路変更。
平成 3（1991）年		渋谷区松濤 2 丁目から豊島区要町 1 丁目まで、約 8.8km 間の幅員拡幅・整備工事が事業認可（区内延長約 2.3km）。
平成 11（1999）年		往復 6 車線で整備する方針が固まる。
平成 13（2001）年		区内街路先行整備区間の工事が始まる。
平成 14（2002）年	11 月	往復 4 車線での整備へ計画変更。 街路先行整備区間の歩道の整備に関して、地元住民、東京都、首都高、中野区で構成された意見交換会が設置される。
平成 15（2003）年	11 月	上記意見交換会での意見が取りまとめられる。
平成 16（2004）年	7 月	一般整備区間の歩道の整備に関しても、意見交換会が設置される。
平成 17（2005）年	4 月	上記意見交換会での意見が取りまとめられる。
平成 23（2011）年	3 月	区内区間の整備完了。
平成 25（2013）年		渋谷区松濤 2 丁目から豊島区要町 1 丁目の整備事業完了。
令和 6（2024）年	12 月	目黒区上目黒 1 丁目～同区青葉台 2 丁目間の事業が完了。 これにより、約 33 年間にわたる山手通り全線の拡幅整備事業が完了。



平成 7 年 6 月、山手通りの高速通り地下化工事風景 中央 2 丁目付近。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアークバ

かんなどおり 環七通

都道 318 号 環状 7 号線

都市計画道路 幹線街路環状第 7 号線

大田区東海（大井ふ頭）から江戸川区臨海町（葛西臨海公園前）に至る全長約 57km の道路で、23 区中 11 区を環状に通過する。名称は都市計画道路の整理番号が俗称として定着し、そのまま通称道路名に採用された。

震災復興と環七通り

大正 12 年 9 月に発生した関東大震災の復興計画として、昭和 2 年に東京特別都市計画委員会が、都市計画道路網を告示した。これにより現在の 23 区に相当する地域に対し、初めて系統的な道路網が決定した。環状 7 号線に相当する部分もこの計画に含まれており、環状 7 号線建設の起源はこの時期に遡る。しかし、用地買収や立ち退きが滞ったため、道路建設は遅々として進まなかった。特に環状線は竣工した箇所から先に開通させていったことから、あちこちに行き止まり路線ができてしまうという事態が発生した。

戦後の復興計画

戦後、東京大空襲などにより焦土と化した都市部の戦災復興計画立案に際し、昭和 21 年に東京 23 区を対象とした放射（1～16）・環状（1～8）路線網からなる幹線道路整備を構想する都市計画が策定された。しかし、もともと予算に対し計画が過大であったことに加え、GHQ は「敗戦国にふさわしくない」と計画への冷淡な態度を示した。24 年のドッジ・ラインによる緊縮財政の影響などもあり、戦災復興事業は大幅に縮小され、建設される区間は一部にとどまり道路建設は再び停滞することとなった。

震災と戦災に伴う 2 度の計画の頓挫、高度経

済成長による人口増加で急速に進行した市街地化、これにより一部（中野区を含む）では木賃ベルト地帯と呼ばれる木造アパートの密集地域が生まれた。こうした地域では道路の幅が極端に狭く折れ曲がり、公園などのオープンスペースも乏しい。現代の中野区でも、狭あい道路（道幅 4 m に満たない狭い生活道路）の多さがたびたび問題としてあげられ、道路の幅員整備が検討されているが、このような歴史的背景が要因の一つとなっている。

東京オリンピックと環七通り

環状 7 号線全線開通の契機となったのは、昭和 39 年の第 18 回オリンピック東京大会の開催であった。当時、東京の道路はアスファルトで舗装された箇所はわずかで、砂利などの簡易的な舗装や未舗装な状態が大半を占めていた。また渋滞が慢性化しており、このままでは開催期間中の選手・観客の移動は困難を極めることが予想された。特に海外との玄関口である羽田空港から、都心の選手村や競技場への交通網の建設は急務とされた。そのため、一般道路 22 路線、事業延長 54.6km におよぶ「オリンピック関連街路」が整備されることとなった。オリンピックという大義名分のもと、多額の事業費が建設予算として計上され、開催の 9 日前までに予定されたすべての路線が開通した。これによって羽田から代々木までの所要時間はそれまでの約 2 時間から 30 分程度に短縮された。



昭和 39 年 9 月、オリンピック関連事業として突貫工事で完成した環七通り。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



昭和 50 年、環七通りの混雑。

出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



昭和 48 年頃、交通公害の発生 交通量の多い環七通り 高円寺陸橋付近で。

出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ

環状 7 号線も大会のメイン会場である駒沢競技場と羽田空港を結ぶ主要道路となることから、オリンピック関連街路として建設が急がれた。環状 7 号線の新設はオリンピック関連街路のなかでも重要な工事の一つとされ、準都市高速道路としてすべての幹線道路、鉄道との立体交差が設けられた。環状リングの西側部分はオリンピック関連期間のわずか 5 年で整備されたが、その後昭和 60 年に全線が開通するまでにおよそ 20 年を要した。このことから、オリンピック関連期間の道路建設がいかに性急に実施されたものかがうかがえる。

中野区における環七通りと周辺地域

中野区を通過する区間も、このオリンピック関連時期に建設された。現在、中野区の大和町と野方は環状 7 号線を境界としているが、それ以前は大新通り（大新横丁）を境に隔てられていた。大新通りは、明治 35 年に現在の野方 WIZ の場所に野方村役場がつくられ、人の往来が増えたことを受け、地域の人々の手によって開設された。この道が元の大場村と新橋村の境界付近であったことから 1 文字ずつをとって大新横丁と名付けられた。また、妙正寺川には橋が架けられ、当時の地名である上沼袋と下沼袋がともに栄えるように沼栄橋と命名された。その後、商店街が誕生し、周辺地域は賑わいを見せるようになった。しかし、環状第 7 号線の建設により境界が変わったことで、その環境は大きく変化した。まず、工事に伴い多くの住民が立ち退きを迫られることとなった。また、立ち退きの対象にならない沿道も、開通後は騒音や光化学スモッグなどの環境問題が発生し、十分な保証もないまま引っ越しを余儀なくされるといった事態が生じた。そして、大新通りはこの環状 7 号線により分断される形となり、その賑わいを次第に失っていった。

昭和 60 年 1 月、環状 7 号線の全線開通を祝う記念式が、17 日午前 10 時過ぎから葛飾区青砥橋上で行われた。最初の計画時からおよそ 40 年（昭和 2 年の告示から考えると約 60 年）の年月が経過していた。

環状 7 号線の建設をめぐることは、立場によって異なる思いがあり、筆舌には尽くしがたい。しかし、今日、中野区民の生活に関わる主要な道路の一つであり、また東京区部で数少ない全線完成した環状幹線道路として都内生活・産業物資輸送の大動脈という重要な役割を担っているのも確かである。もしも環状 7 号線の西側部分がオリンピック道路として完成していなければ、その後の東京の交通事情は大きく変わっていたものと思われる。

ボーダーラインとしての環七通り

環状7号線には道路としての機能とは別の役割もある。例えば、東京都で震度6弱以上の地震が発生した場合、環状8号線と環状7号線を境界線とした交通規制が行われる。環状8号線から内側へ向かう車両に対しては青信号の時間短縮が行われ、環状7号線から内側については流入禁止となる。これは都心部の交通混乱回避のための措置であり、従来は環状7号線以内の地域では全面通行禁止だったが、平成23年の東日本大震災を踏まえ、環状7号線の内から外へ向かうことは認められるように変更された。

また、環状7号線は警視庁交通量調査の「スクリーンライン（都心への流入・流出を把握するための基準線）」としても活用されており、これらのことから環状7号線は都市の内と外を分ける境界線としての機能を果たしているといえる。

神田川・環状七号線地下調節池

環状7号線の道路下には延長4.5km、内径12.5mのトンネルが造られている。東京都の事業として、水害が多発していた神田川中流域の水害に対し安全度を早期向上させるために建設された。この施設には神田川、善福寺川及び妙正寺川からあふれた水、約54万 m^3 （小学校の25mプール1,800杯分程度）を貯蔵することができる。調節池は主に、川からの洪水を取り入れ、地下のトンネルへ導く取水施設、流入した水を貯水する調節池トンネル、流入や排水設備等の運転操作や監視制御を行う管理棟の3つの施設で構成されている。

完成には相当の期間を要するため、早期に事業効果を発揮させる目的で、工期はあらかじめ第1期、第2期に分割して整備された。第1期事業では「神田川取水施設」と「延長2.0kmのトンネル」が建設され、これにより神田川からの洪水約24万 m^3 を流入させることが可能になった。工事は昭和63年から着手し、平成10年度に管理棟等の完成により事業完了となった。なお、完成に先立ち9年4月から取水を開始し、下流域の水害軽減に大きな効果を発揮した。

第2期事業では第1期トンネルと接続する「貯

留量約30万 m^3 、延長2.5kmのトンネル」と善福寺川及び妙正寺川から洪水を流入させるための取水施設等が建設された。着工は平成7年、善福寺川取水施設は17年9月から取水を開始、19年3月には管理棟を含む全てが完成した。また、妙正寺川取水施設は19年3月から取水を開始、20年に完成した。これにより、平成5年の台風11号発生時に3,000棟を超える浸水家屋が生じたのに対し、同規模の降雨があった16年10月の台風22号の際には、浸水家屋は46棟となり被害は激減した。なお、この施設の制御は善福寺川取水施設の管理棟で行われているが、中野区役所5階にある東京都第三建設事務所からも遠隔で行うことができる。

中野区立の小学校ではこの善福寺川取水施設トンネル内の見学を体験学習として取り入れており、トンネル内の壁面には小学生の描いたイラストで装飾された箇所がある。トンネル内の見学（無料）は一般を対象としたものも実施されており、東京都第三建設事務所のホームページから申し込むことができる。



善福寺川取水施設外観。
写真：職員撮影



トンネル内部。
写真：職員撮影



年表

年月日		できごと
明治 22 (1889) 年		現在の中野区北部に存在した 7 か村が合併し、野方村が成立する。
明治 35 (1902) 年		現在の野方 WIZ の場所に野方村役場がつくられる。
		この頃、人の往来が増えたことを受け、地域の人々の手によって新しい道路が開設され、この道が元の大場村と新橋村の境界付近であったことから 1 文字ずつをとって大新横丁と名付けられた。 また、妙正寺川には橋が架けられ、当時の字名上沼袋と下沼袋がともに栄えるように沼栄橋と命名された。
昭和 2 (1927) 年	8 月	東京特別都市計画委員会が、計画区域全域（ほぼ現在の 23 区の範囲）に対し、都市計画道路網を告示する。 郊外に幅員 22-25 m の幹線放射道路 16 本、幹線環状道路 3 本（環 6、環 7、環 8 と命名）を配置し、その間に幅員 12-22 m の補助線道路 109 本決定した。
昭和 3 年 (1928) 年		復興局が「東京都市計画書道路網図」を発行。
昭和 21 (1946) 年		石川栄耀（東京都建設局都市計画課長、後建設局長）主導で、昭和 2 年の大東京道路網計画をベースに東京の戦後復興計画が決定。
昭和 21 (1946) 年	3 月 26 日	戦災復興院告示第 3 号 第二次世界大戦の戦災復興に際し、東京 23 区内を対象に、幹線道路として放射（1 ～ 16）・環状（1 ～ 8）路線網の整備を構想する都市計画が策定。
昭和 33 (1958) 年		道路整備緊急措置法制定（緊急道路整備計画）。
昭和 34 (1959) 年	10 月 30 日	オリンピック東京大会組織委員会が「施設に関する基本計画」を決定、発表。
昭和 36-40 (1961-65) 年		「東京都緊急道路整備事業計画図」が作成される。
昭和 38 (1963) 年	6 月	「環七通り」が通称名として設定される。
昭和 39 (1964) 年		オリンピック開幕の 9 日前までに予定路線のすべてが開通する。環状 7 号線の西側部分が開通。
	3 月	大和陸橋竣工。
	4 月	丸山陸橋竣工。
	8 月	環状七号線（オリンピック道路：大田区南千束町～板橋区本町区間）開通。
昭和 59 (1984) 年		起点と終点が変更される。 起点：「太田区大森 2 丁目」→「大田区東海 1 丁目（国道 357 との交点）」 終点：「足立区新田 1 丁目」→「江戸川区臨海町 4 丁目（国道 357 との交点）」
昭和 60 (1985) 年	1 月 17 日	最終区間（青砥 8 丁目 ～ 奥戸 7 丁目）が完成し、全面開通する。 同日、葛飾区青砥橋上で全線開通を祝う記念式が行われる。
昭和 61 (1986) 年	12 月 22 日	「神田川・環状七号線地下調節池」の第 1 期事業が東京都告示第 1354 号により都市計画決定される。
昭和 63 (1988) 年		第 1 期事業、着工。
平成 2 (1990) 年	1 月	第 2 期事業が東京都告示第 86 号により都市計画決定される。
平成 7 (1995) 年		第 2 期事業、着工。
平成 19 (2007) 年	3 月	善福寺川取水施設完成（取水は平成 17 年 9 月～）。
平成 20 (2008) 年	3 月	妙正寺川取水施設完成（取水は土木施設が完成した平成 19 年 3 月～）。

わ せ だ ど お り 早 稲 田 通 り

都道第 25 号 飯田橋石神井新座線
都市計画道路 補助第 74 号線

「早稲田通り」は、千代田区九段 2 丁目の皇居田安門交差点から、杉並区上井草 4 丁目の井草八幡前交差点までの約 15km を東西方向に貫く都道である。全国的に珍しい逆転式一方通行の神楽坂通りも含まれている。

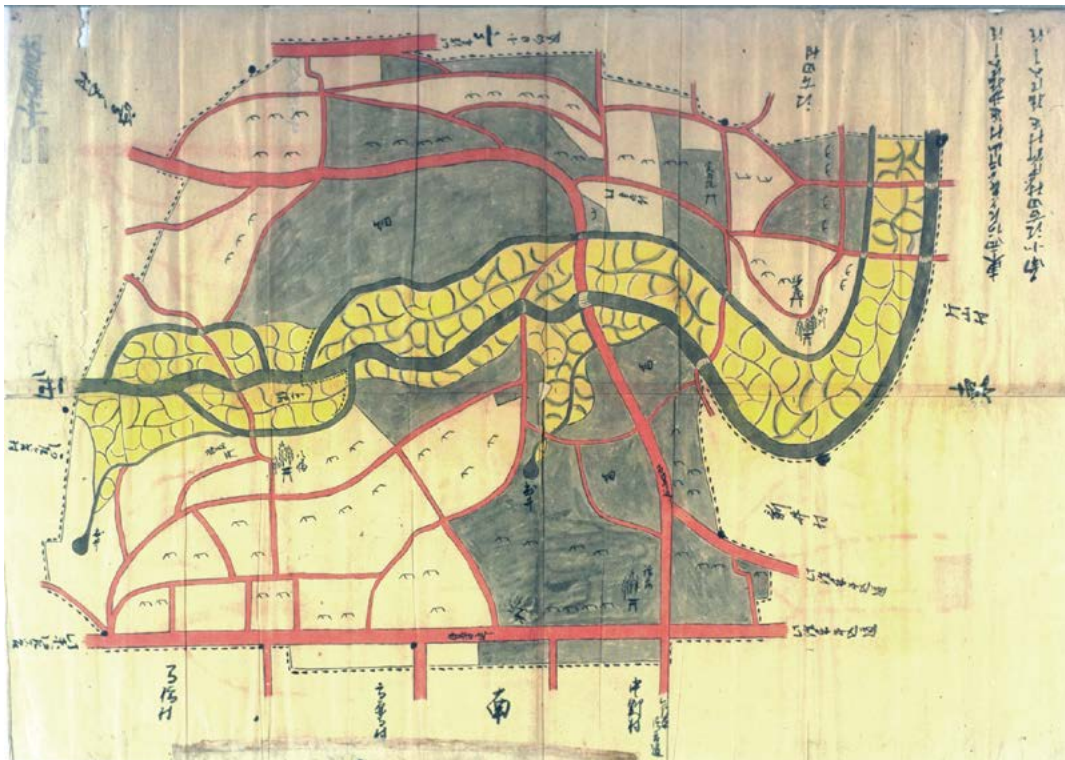
早稲田通りの原形

原形となった道の記録として、現在中野区内で確認できている最も古いものは、「堀江家文書」の中の 5 代将軍徳川綱吉の犬小屋の位置を記した「犬小屋御囲場絵図」である。囲い^{おかこいば}に沿って多少の迂回はあるものの、現在の早稲田通りと同じ位置に記されている。また同史料内の文化 3 年、

沼袋村（現・大和町）が記された「上・下沼袋村の絵図」では「井草道」と呼ばれていたことも確認できる。

その後、明治 44 年発行『大日本名所図会』では、梅照院（新井薬師）への参詣道として「北方所澤街道」という名が記される。また、長谷川伸が書いた小説『八丈つむじ風』にも登場し、舞台の題材であろう地蔵尊が、早稲田通りから梅照院へ逸れる柳通り（新井 1 丁目 1 番）の入り口に現存している。「所澤道」はその名の通り所沢へ続く道として、『中野区史』や『武蔵野方町史』で紹介されている。

早稲田通りは、青梅街道の裏道でもあった。産業通りとしても知られ、この道を使い農村から市場まで野菜などを運んでいた。市場の帰りには^{しもごえ}下肥を運んでいたため、「おわい街道」などとも呼ばれた。早稲田通りは現在よりも急な坂道で、大正時代、新宿から中野方面に帰る人々は小滝橋付近の飲み屋で休憩を入れてから坂を上っていたという。昭和初期から自動車が増え、砂利道だった道路は昭和 7 年頃に舗装された。



上・下沼袋村絵図。南側をまっすぐに横断する道に「井草道」と書かれている。
所蔵：東京都立大学図書館本館 堀江家文書 S70 トリミング



昭和 12 年、早稲田通り。新井薬師道附近より西方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



梅照院へ分岐する道にある地蔵尊。
写真：職員撮影



昭和大道商店街。昭和通りの名称が残っている。
写真：職員撮影

名称の由来

「早稲田通り」という通称が正式決定される前は、地元では区画ごとに違う名前と呼ばれていた。大場村（旧・沼袋村、現・大和町付近）を通る辺りを地名から取って「大場通り」、昭和通 1～3 丁目（現・上高田、新井付近）を通る辺りを、昭和天皇即位にちなんで「昭和通り」と分けて呼んでいた。なお、この呼び名は現在も人々に親しまれ、商店街やバス停の名称として使われ続けている。

通称名が「早稲田通り」となったのは、東京オリンピックの開催が迫る昭和 37 年のことである。東京都によって、千代田区九段 2 丁目から練馬区上石神井 2 丁目（現・石神井台 5 丁目）までの区間の通称が統一された。この際、「大場通り」「昭和通り」だった箇所も、新宿区榎町から馬場下町の区間名であった「早稲田町通」から取った

名前に変更された。当時は現路線とは異なり、杉並区本天沼 2 丁目の交差点を北上し、石神井公園を終点としていた。北上せず東西方向を貫く現路線に変更されたのは、59 年のことである。

都市計画道路

都市計画道路としての早稲田通りは、昭和 2 年 8 月 18 日決定の東京特別都市計画委員会による主要道路の新設改修計画にて、「豊多摩郡戸塚町大字戸塚」から「豊多摩郡井荻町大字上井草」の区間が「補助線道路 43 号線」と定められた。7 年発行の『東京府道路概要』の「東京府知事執行都市計画道路改修事業進捗図」を見ると、第 2 期改修事業路線に指定されていることが確認できる。しかし戦争の混乱を経て、都市計画は東京戦災復興計画へと改めることとなり、21 年 4 月 25 日付の「戦災復興院告示第 15 号」にて、「補

助第 74 号線」に設定し直された。

『中野区史』では、早稲田通りを所澤道の名で重要な交通網の一つとして取り上げている。しかし、大場通りと呼ばれたあたりは、広い地域を意味する「大場」という名称に似合わず、道幅が狭く、交通の難所として知られていた。昭和 13 年から道路拡幅運動が始まったが、第二次世界大戦を挟み、45 年に 32 年間の月日を要して拡幅が実現した。拡幅にあたり敷地を削られることになった商店は、「削られる分だけ上へ伸びればいい」との考えから、建物を鉄筋 3 階建てにするという、道路改良を積極的に利用した例として話題となった。

先に挙げた『大日本名所図会』や『中野区史』

の記述以外にも、中野の都市計画における早稲田通りの重要性をうかがい知れる存在が「中野ブロードウェイ」である。中野サンモール商店街で商いをする人々の、道の中野駅から昭和通りまで繋げて新井町方面に流れる人々を呼び込みたいという願いから、昭和 41 年 10 月におよそ 7 年の歳月をかけて完成した。

令和 7 年現在、道路事業中区間は、中野区中野 4 丁目～中野区野方 1 丁目と、杉並区本天沼 2 丁目～杉並区下井草 5 丁目の 2 か所である。どちらの区画も、交通の円滑化を図るための拡張工事であるが、杉並区の方は、電線類の地中化工事も同時に行われる予定である。



昭和 7 年、補助線 43 号工事前（小滝橋）。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 8 年、補助線 43 号旧景。小滝橋付近より西方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 12 年、補助線 43 号旧景。中野区昭和通三丁目より西方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 15 年、早稲田通り工事前。中野区大和町にて東方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター

年表

年月日		できごと
元禄 10(1697) 年		『犬小屋御囲場絵図』にて名前の記載はないが、早稲田通りの位置に道がある。
文化 3(1806) 年		「上・下沼袋村の絵図」（現大和町）に「井草道」の名前で早稲田通りが載っている。 「井草道（旧所沢街道、現在の早稲田通り）」とある。
文政 13(1830) 年		『新編武蔵風土記稿』の「枝郷大場村」の項にて、「村の南に一條の往環あり」と記述されている。 「梅照院」の項にて、「豊嶋郡下高田馬場のほとり、道の辻々に碑標をたてゝ方向を示す」とある。 柳通の入り口に地藏尊が残ることから、この道も早稲田通りと推察する。
大正 9(1920) 年	4 月	東京府告示第 162 号により「東京府道第 26 号 戸塚吉祥寺線」との路線名で認定される。
昭和 2(1927) 年	8 月 18 日	「豊多摩郡戸塚町大字戸塚」から「豊多摩郡井荻町大字上井草」の区間が都市計画道路の「補助線道路 43 号線」と認定される。
昭和 4(1929) 年		「東京府豊多摩郡野方町全図」の、早稲田通りの位置に「至下井草 15 m」の文字が確認できる。 この当時は舗装されず砂利道だった。
昭和 5(1930) 年 4 月 昭和 6 年 (1931)2 月		東京府告示によって府道 26 号線に沿う地域の町名を「昭和通」に改め、東から 1 ～ 3 丁目に分ける。
昭和 7(1932) 年頃		舗装工事が行われる。
昭和 13(1938) 年		中野区大和町から杉並区井荻の約 2,400 m の道幅拡張運動が地元住民によって始まる。
昭和 21(1946) 年	4 月 25 日	戦災復興院告示第 15 号にて、「補助 74 号線」に設定される。
昭和 29(1954) 年		中野、杉並区民が協力して都に道幅拡張の嘆願する。
昭和 34(1959) 年	4 月 2 日	都と地元（中野区大和町から杉並区井荻）代表が用地買取りなどの具体的な話し合いを行う。 中野区大和町から杉並区阿佐ヶ谷 6 丁目までを両側に各 4.5 m 拡げる計画が立つ。
		両側の商店約 60 軒が用地買取で削られる分を上には伸ばし、鉄筋 3 階建てにする計画が決まる。
	12 月 20 日	計画母体である「造成振興会」の総会を開き、建蔽率を高くするために、沿道を防火地域に指定するように都に要請することが決まる。
昭和 35(1960) 年	11 月 10 日	中野区報「新井町の区域変更 新町名地番に」の地図上に「昭和通」が確認できる。
昭和 37(1962) 年	4 月 25 日	「千代田区九段 2 丁目（九段坂）」から「練馬区上石神井 2 丁目（石神井公園）」の通称道路名を「早稲田通り」と制定。
昭和 38(1963) 年	10 月 31 日	区報にて「早稲田通」と表記される。
昭和 39(1964) 年	12 月 28 日	主要地方道飯田橋石神井新座線に指定される。
昭和 40(1965) 年	4 月 1 日	東京都告示第 287 号により、起点杉並区向井町から終点同区新町の区間が、都道「438 号向井町新町線」として認定。
昭和 41(1966) 年	4 月 1 日	東京都告示第 253 号により、都道の「25 号飯田橋石神井新座線」と認定される。区間が、新宿区下宮比町から練馬区西大泉町までに決定。
昭和 45(1970) 年		中野区大和町と杉並区下井草間の拡幅工事が完成。
昭和 59(1984) 年	5 月 1 日	主要地方道 25 号飯田橋石神井新座線の一部を分離して、特別都道 438 号を加えた現路線に変更された。 終点「練馬区石神井台 5 丁目」が「杉並区上井草 4 丁目」に変更。
令和 7(2025) 年現在		中野区中野 4 丁目～中野区野方 1 丁目の街路整備事業が進んでいる。

しんおうめかいどう 新青梅街道

都道 440 号 落合井草線

都市計画道路 補助線街路第 76 号線

「新青梅街道」は、新宿区西落合 3 丁目の目白通りから、瑞穂町箱根ヶ崎の青梅街道との交点までの、約 32.6km の道である。中野区内では北側に位置し、東西を貫いている。

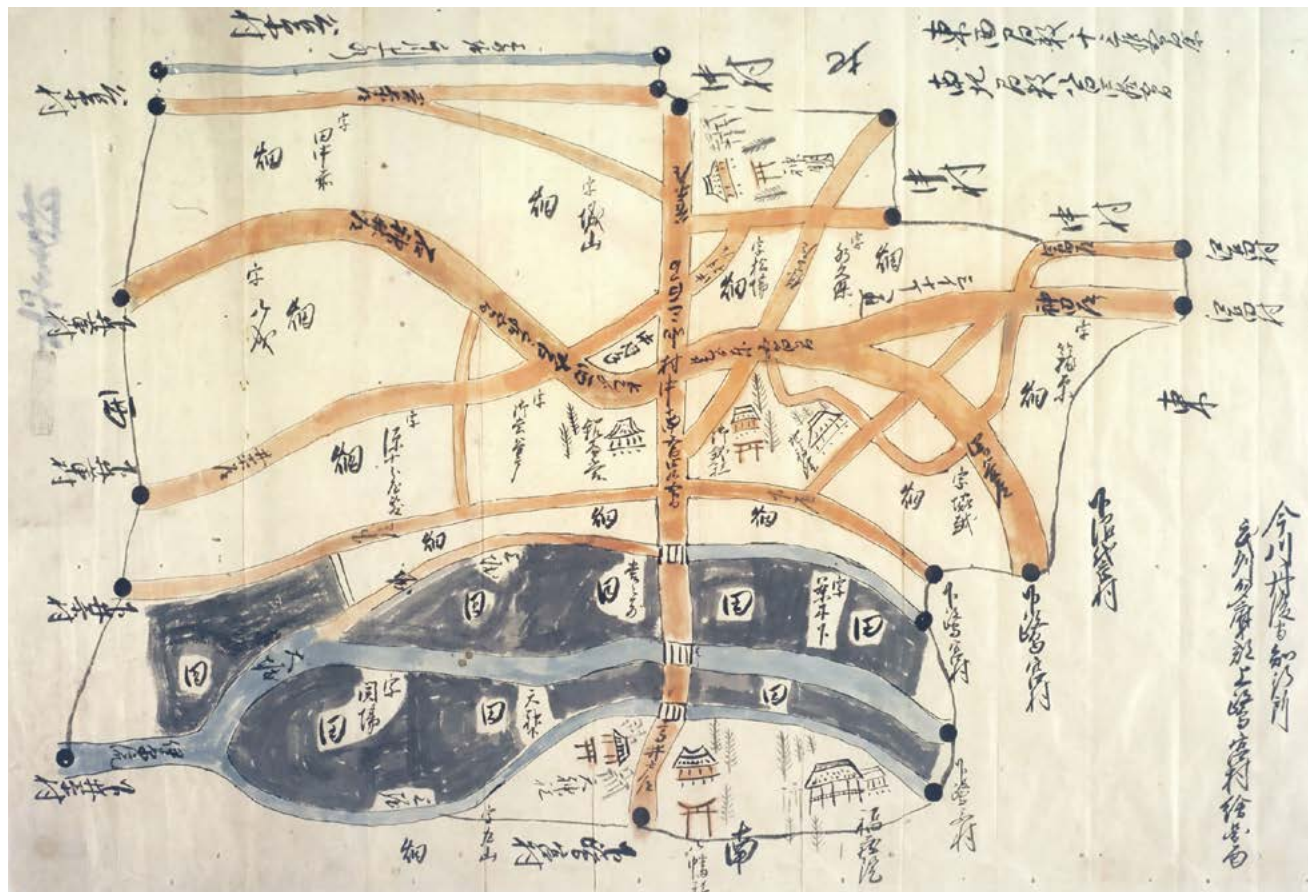
新青梅街道の原形

新青梅街道の原形となった道の記録は、江戸時代後期に書かれた『武蔵名勝図会』や『新編武蔵風土記稿』といった書物や、中野村の名主であった堀江家の文書の一部である「上鷲宮村絵図」などに残っている。特に『新編武蔵風土記稿』には、

当時すでに「古の街道の名残」といわれている道であったと書かれている。

江戸時代に使われていた道であることを示すものとして、街道沿いには道しるべとしても使われた庚申塔がいくつか残されている。最も年代が古いものは鷲宮 4 丁目にある元禄 10 年と刻まれたものである。他にも、昭和 9 年頃まで江古田 4 丁目 35 番の三差路に東向きに建っていた庚申塔には、正徳 3 年という年号と「武州多摩郡江古田村 右 中村道 左 さぎのみや」という文字が刻まれている。江戸時代、大奥に務めていた村尾嘉陵という人物が記した紀行、通称「江戸近郊道しるべ」にもこの庚申塔らしきものが登場する。紀行からは、文政 5 年当時の新青梅街道周辺の様子を知ることができる。この庚申塔は、道路拡張工事のため、昭和 12 年頃に沼袋 4 丁目 33 番へ移設された。

江戸時代以前にこの道があったことを示す明確な記録はないが、道があったと推測できる出来事として、文明 9 年（室町時代）の江古田原



今川丹後守知行所武州多摩郡上鷲宮村絵図。中央を東西に走る道の西側より「石神井道」と記載されている。

所蔵：東京都立大学図書館本館 堀江家文書 S62

沼袋合戦が挙げられる。この合戦は太田道灌^{おおたどうかん}と
としまやすつね やすあき
豊島泰経・泰明兄弟との合戦であるが、新青梅街
道沿いが主な戦場となったといわれている。それ
を裏付けるものとして、現在は区画整理などでほ
とんどが無くなってしまったが、丸山陸橋付近か
ら東側の地域にかけて、合戦の戦死者を葬ったと
される「豊島塚」と総称する塚がいくつも街道沿
いに点在していた。その一つであるといわれる「お
経塚」については、江古田2丁目に中野区教育
委員会による説明板が現在も設置されている。

これらの記録を見るに、新青梅街道の原形と
なった道は、江戸時代以前から存在していたであ
ろうことが想像できる。

名称の移り変わり

「新青梅街道」という通称名は、昭和59年に
東京都によって正式に決定した。前出の資料を見
ると、古くは「石神井街道」や「石神井道」、「小
石川道」との名前で記録されている。その後時代
を経るにつれ、「旧目白通り」、「丸山通り」、「新
水道道路」、「バス通り」、「改正道路」、「新青梅街
道」などの名前で呼ばれていたようで、資料には
様々な名称が登場する。

「新青梅街道」という名前の由来は、「青梅街道」
の交通量が増え混雑するようになり、並行してい
るこの道路を迂回路として利用する車が増えたた
めだといわれている。

通称名のほかに、道路を管理するために付けら
れた名称もある。江戸から明治になった頃、新青
梅街道の原形となる道は村道であったが、大正9
年に公布された旧道路法により、起点「北多摩郡
田無町」から終点「東京市小石川区」の区間が
「東京府道第40号 田無小石川線」という名称で
認定され、東京府の管理する府道となった。戦
後、現行の道路法が新たに制定されると、都道は
整理され、昭和40年に「都道440号落合井草線」
と名称が変更された。

また、関東大震災後の昭和2年には、復興の
ための東京都市計画によって「豊多摩郡落合町下
落合北豊多摩郡界」から「北豊島郡石神井村大字
上石神井」の区間が「補助線道路44号線」と名
付けられた。この都市計画も戦後に見直され、昭



昭和33年12月、江古田4丁目・丸山交差点から東方を望む。道路改修工事。

出典：でじなちいきの写真と図書のアーカイブ



昭和39年9月、江古田4丁目バス通り西方。小石川通りとも。

出典：でじなちいきの写真と図書のアーカイブ



令和6年、江古田4丁目の沼袋交差点から東方を望む。

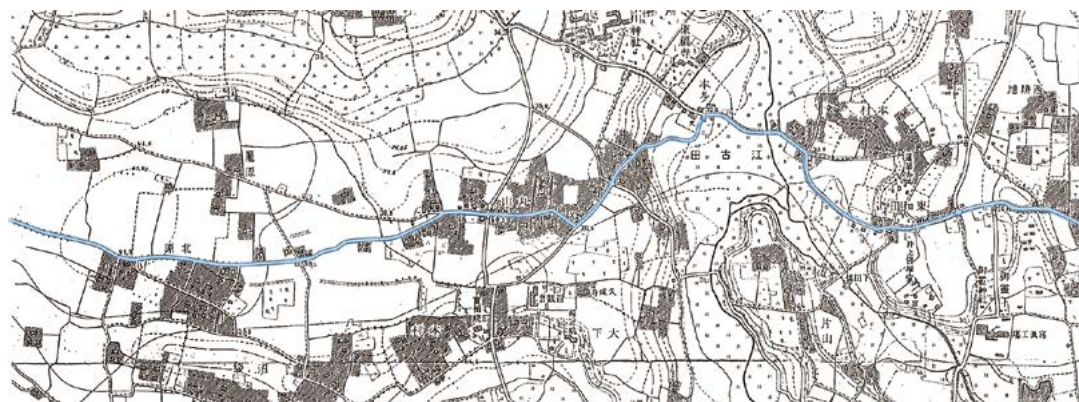
写真：職員撮影

和 21 年に「補助線街路 76 号線」と改称されている。

都市計画による整備

現在の新青梅街道の道筋は、概ね昭和 2 年の東京都市計画によって計画され、昭和 42 年に多摩地区から都心を結ぶ道路として開通した。中野区内の区間について、前述した江戸時代の史料や、明治 13 年頃に作成された通称「迅速測図」といった地図と、現在の道筋を比べてみると、変化している部分がいくつか見て取れる。特に大きくルートの変更があったのは江古田地域である。

江古田 4 丁目交番付近から 1 丁目の蓮華寺付近までの区間は、現在はほぼ直線の道だが、実際は北側に半円を描くような形で大きく迂回していた。この道筋は、関東大震災後の東京都市計画によって、昭和 9 年に始まった江古田の区画整理と共に整備が始まり、昭和 11 年に開通したといわれている。旧道は、地図を見比べると、現在も部分的にその名残が存在する。



新青梅街道の原形となった道。

出典：国土地理院発行 1 万分の 1 地形図「新井」大正 10 年



北側に迂回していた道が直線的な道に整備されたことがわかる。

出典：国土地理院発行 1 万分の 1 地形図「新井」昭和 12 年

また、鷺宮にも昔の道筋が確認できる。鷺宮 4 丁目中杉通りとの交差点から西側、武蔵丘高校へ向かう分岐に至る約 400 m の区間は、南側に弓なっている道が本来の道筋であった。国土地理院が公開している航空写真をみると、昭和 38 年 6 月 26 日の撮影時点ではまだ旧道が使われており、新道の工事も始まっていないように見える。昭和 39 年 10 月のオリンピックを前に中野区内の区間が完成したと書かれた資料があるので、この区間は約 1 年程度の期間で工事が行われたようである。現在、鷺宮 4 丁目 46 番 5 号にある駐車場の片隅には、旧道沿いに庚申塔が残っており、過去の道筋を今に伝えている。

都市計画では道筋の変更だけでなく、道幅の変更も行われてきた。古くは 2 間程度(約 4 m)だった道幅が、戦後 15 m に拡張された。また、新青梅街道の中野区外の区間では、拡張などの計画が現在も進行中だ。

年表

年月日		できごと
文明 9 (1477) 年		太田道灌と豊島泰経・泰明兄弟が争った、江古田原沼袋合戦がおこる。
江戸時代後期		「石神井街道」や「石神井道」と呼ばれる。
明治 13 (1880) ～ 明治 19(1886) 年頃		迅速測図に村道として描かれる。
大正 5 (1916) 年		「小石川道」との名称が『東京府豊多摩郡誌』に現れる。
大正 8 (1919) 年	12 月	東京府会にて、府県道の路線認定についての諮問が行われる。 府県道認定調書に「第 30 号田無落合線」として記載される。
大正 9 (1920) 年	4 月 1 日	大正 8 年に公布された、旧道路法が施行。 東京府告示第 162 号により「東京府道第 40 号 田無小石川線」との路線名で認定される。 都市計画法実施。
昭和 2 (1927) 年	8 月 18 日	東京都市計画道路の新設、改修が内閣の認可を得て告示される。 「豊多摩郡落合町下落合北豊多摩郡界」から「北豊島郡石神井村大字上石神井」の区間が都市計画道路の「補助線道路 44 号線」と設定される。
昭和 9 (1934) 年	7 月 15 日	江古田の区画整理が始まる（第 1 次 ～ 1940 年・第 2 次 1936 ～ 1945 年）。
昭和 11 (1936) 年		江古田 4 丁目より東側が一部開通。「丸山通り」と呼ばれる。
昭和 21 (1946) 年	4 月 25 日	戦災復興院告示 15 号にて、都市計画道路の「補助 76 号線」と設定される。
昭和 22 (1947) 年	11 月 26 日	幅員が 15m に変更される。
昭和 36 (1951) 年	3 月 15 日	道路法に基づき、起点「新宿区西落合 1 丁目千代田練馬・田無線交点」から終点「杉並区八成町 11 号線交点」までが都道 19 号として認定される。
昭和 38 (1963) 年		新青梅街道江古田地域の区間が完成か。
昭和 39 (1964) 年		オリンピックを前に中野区内の区間が完成。
昭和 40 (1965) 年	4 月 1 日	「新宿区西落合 1 丁目」から「杉並区井草 4 丁目」の区間が都道 440 号落合井草線と認定される。
昭和 42 (1967) 年	11 月 27 日	新青梅街道が全線開通。
昭和 59 (1984) 年	5 月 1 日	東京都によって道路の通称名が「新青梅街道」と設定される。
令和 6 (2024) 年	10 月 10 日	都市計画道路 補助線街路第 76 号線の変更が行われる。 これまで未指定だった車線数を全線で 2 及び 4 車線に決定。中野区内の区間は 2 車線。



鷺宮 4 丁目の庚申塔。
写真：職員撮影



昭和 32 年、中野区鷺宮 5 丁目 1 番付近。新青梅街道旧道。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ

なかのどおり 中野通

都道 420 号 鮫洲大山線
都市計画道路 補助線街路第 26 号線

中野通りは、中野区の南北方向を貫く道路で、渋谷区笹塚の甲州街道を起点とし、新宿区西落合の目白通りに至る延長約 7km の都道である。補助第 26 号線の通称が「中野通り」と正式に命名されたのは、昭和 37 年 4 月 25 日のことである。また、中野通りをさらに南北に延伸する「都道 420 号 鮫洲大山線（品川区～板橋区）」が、環状 6 号線（山手通り）と環状 7 号線（環七通り）の間を並行して走るため、「環状 6.5 号線」という俗称もある。



昭和 4 年、中野通り。南側から中野駅高架線の眺め。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



令和 6 年、中野通り。南側から中野駅高架線の眺め。
写真：職員撮影

中野通りには、哲学堂交差点から南長崎 6 丁目交差点にかけて、中野区と新宿区の境界線となる箇所が存在する。JR 中野駅、中野サンプラザ、新井薬師公園、哲学堂公園、野方配水塔、かつて存在した桃園橋など、道路沿いにはランドマークも多い。また、青梅街道（杉山公園交差点）、新青梅街道（蓮華寺下交差点）、早稲田通り（新井交差点）、方南通り（南台交差点）、大久保通り（中



昭和 4 年、中野通りと中野駅南口広場。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



昭和 31 年、中野駅南口広場。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



令和 6 年、中野通りと中野駅南口広場。駅ホームより南側を望む。
写真：職員撮影

野五差路交差点) など、区内の主要な道路との交差点が多数あるのも特徴である。

戦前の中野通りと中野駅

現在は中野駅を南北にまっすぐ貫く中野通りだが、昭和前期まで、駅の位置も中野通りの姿も現在のものとは全く異なっていた。

JR 中央線の前身である甲武鉄道が開業した明治 22 年 4 月 11 日、中野駅は、現在の位置より約 100 m 西側に「中野停車場」として開設された。当時の改札口は南口のみであり、現在の桃園通りが駅前通りで、駅周辺は桑畑や麦畑が広がる農村地帯だった。また、駅の北側は陸軍鉄道大隊が占めており、南北を往来するには踏切を渡る必要があった。

関東大震災後、下町から山の手以西への人口流入に伴い、中野駅一帯の急速な発展と駅利用者の激増による、駅周辺の拡張が課題となった。当時、駅の北側には陸軍施設が、南側は商店街が発展していたため、敷地が広く開発の余地があった東側の土地を求めて、昭和 4 年 11 月 1 日に中野駅は移転・改築した。完成した駅舎は、マンサード屋根の牧舎風な外観が特徴的だった。この時に南口と北口が設けられ、さらに、中野通りを南に延長し鉄道の下へ通す計画のもと、大規模な土地の掘り下げ工事が行われた。陸橋ではなく掘り下げと

決定したのは、商店街が、陸橋を渡る車や馬車による土埃を被らないようにするためだった。この工事は、道幅 6 間 (約 10.9 m) という当時としては広い道路を掘削してつくる大工事だった。その様子は、「南口広場は東西約 130 m、南北約 150 m、深さ約 4 m にわたって掘り下げるとい、現代の団地造成にも劣らない大土木工事」であったと、『鉄道にみる中野の歴史』にも描写されている。

その翌年の昭和 5 年 5 月 19 日、中野駅を南北に通る、高さ 6m・幅 7m の架道橋 (線路下ガード) が完成した。完成当時は鉄骨ではなく、コンクリートの架道橋だった。中野駅北口・南口一帯の掘り下げ工事は、『サンモールの歩み』によると、馬



昭和 4 年、全面改築された当時の中野駅 (マンサード屋根の外観)
出典：でじな ちいきの写真と図書のアーカイブ



中野駅移動前。
出典：国土地理院発行 1 万分の 1 地形図
「新井」大正 10 年



中野駅移動後。
出典：国土地理院発行 1 万分の 1 地形図
「新井」昭和 12 年

車が毎日 40 台から 50 台来て土取りをし、自分たちの力で家屋を下げたと書かれている。また、『桃園橋の歴史』では、「中野駅西の線路の下を切り通しに掘り下げ、南側は桃園川段丘崖下の等高線（標高 33.75 m）に沿う古道までの土地をゴツゴツりほぼ同じ高さに掘削し、桃園川の氾濫原には盛り土をして、高低差の少ない平坦な道路がつくられたことがわかる」とある。さらに、中野通りはまっすぐ南方向へ延長し、その先の桃園通りと大久保通り（当時の宮園通り）の交差点が、中野五差路となった。

このようにして、現在のように中野駅を平坦かつ直線的に貫く中野通りが出来上がった。しかしながら、戦前までの中野通りはまだ短く、北側へ伸びる道は新井交差点までで、南側の杉山公園交差点～十貫坂上交差点の区間は未開通だった。

戦後の中野通り

昭和 20 年 5 月 25 日、山の手空襲で中野は沼袋・新井薬師・江古田一帯を中心に壊滅的な被害を受けた。翌 21 年 4 月 25 日には、戦災復興計画によって、東京都市計画道路補助線街路第 26 号線（現・中野通り）の拡幅が計画・決定された。これにより工事が進み、哲学堂方面～西武線までは 27 年に完成、西武線～早稲田通りに至る区間は、23 年 9 月に事業を開始した新井復興土地区画整理組合の手によって 28～32 年頃までに完成した。この時、地元選出の組合長である窪寺伝吉くぼでらでんきちの意志によって、中野通りの街路樹を桜に決定したという。

南側の未開通区間（杉山公園前～十貫坂上）については、『明治前期・昭和前期東京都市地図 東京北部』に収録されている地形図を見ると、31 年までに開通していることが確認できる。後の 33 年には、同区間の硬質補装改修の請願が採決された。オリンピックが開催された 39 年、中野通りが新井交差点からさらに北に伸び、哲学堂まで開通した。その後、中野駅北口の補助 26 号路線拡幅による商店の立ち退きなども経て、50 年 3 月には新井の五差路から中野駅南口に至る区間も完成した。

令和 7 年現在の道路事業中区間は、中野区江

古田 1 丁目～新宿区西落合 4 丁目である。南北方向の交通の円滑化を図るため、蓮華寺下交差点から 150m ほど新青梅街道と合流する箇所を、合流させずに蓮華寺下交差点 T 字路を十字路に改良し目白通り方面へ貫く工事で、7 年頃までに完成する予定だ。

中野通りに存在した「桃園橋」

中野五差路のすぐ南には、かつて、桃園橋があった。桃園橋は、江戸時代に木橋が架けられ、大正 15 年から幅員約 6m のコンクリート橋の時期を経て、昭和 11 年 2 月に幅員 15m の鋼鉄桁橋に架け替えられた。その後、桃園川は昭和 46 年頃にかけて暗渠化あんきょされ、中野通りの道路拡張による影響を度々受けていた桃園橋は、令和 3 年の工事により親柱と欄干が完全に撤去された。



昭和 32 年、中野通り松が丘付近。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



現在の中野通り松が丘付近。上の写真より 100 m 北側から撮影。
写真：職員撮影

年表

年月日		できごと
明治 22(1889) 年	4 月 11 日	甲武鉄道開業（新宿～立川間）。現在の駅よりも 109 m 西側に中野停車場が開設。
昭和 2(1927) 年	8 月	都市計画道路決定し、補助 47 号線として計画される。計画幅員は 11 m。
昭和 4(1929) 年	11 月 1 日	中野駅が、東側移転により現在の位置に完成。
昭和 5(1930) 年	5 月 19 日	中野駅を南北に通る架道橋（線路下ガード）が完成。
昭和 20(1945) 年	5 月 25 日	山の手大空襲で、沼袋・新井薬師・江古田一帯が壊滅的な被害を受ける。
昭和 21(1946) 年	4 月 25 日	戦災復興院告示第 15 号にて、都市計画街路の「補助第 26 号線として設定される。
昭和 23(1948) 年		新井復興土地区画整理組合が事業開始。西武線より早稲田通に至る区間の工事を担当。
昭和 26(1951) 年		中野駅南口の駅前広場が完成。ロータリーも設置される。
昭和 27(1952) 年	12 月 19 日	哲学堂方面より西武線までの区間が完成。
昭和 28-32(1953-57) 年頃		新井復興土地区画整理組合によって、西武線から早稲田通りまでの区間がこの頃までに完成。
昭和 36(1961) 年	7 月 7 日	補助 26 号線拡幅について事業決定（早稲田通りより五差路の区間）。
昭和 37(1962) 年	4 月 25 日	補助 26 号線を「中野通り」と正式に命名。
昭和 37(1962) 年		中野駅付近再開発計画が持ち上がる（中野駅北口広場の拡張計画）。
昭和 39(1964) 年		東京オリンピック開催。中野通りが新井交差点から北に伸び、哲学堂まで開通。
昭和 41(1966) 年	3 月	東京地下鉄東西線が中野駅まで開通。中野駅は現在まで使用されている鉄筋コンクリート造りへと改良。
		中野駅付近の道が拡幅され、広い歩道ができる。
昭和 50(1975) 年	3 月	五差路より中野駅南口に至る区間が完成。
令和 3(2021) 年	6 月	桃園橋の道路付属物撤去。
令和 7(2025) 年 現在		中野区江古田 1 丁目～新宿区西落合 4 丁目が道路事業中。 蓮華寺下交差点 T 字路を十字路に改良し、目白通り方面へ貫く事業が進行中。



昭和 41 年、中野駅を北側から望む。

出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



昭和 45 年、旧丸井百貨店と中野通り。

出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ

お お く ぼ ど お り 大久保通り

都道 25 号 飯田橋石神井新座線 / 433 号 神楽坂
高円寺線

都市計画道路 放射第 25 号線 / 補助線街路第 71
号線

「大久保通り」は新宿区下宮比町^{しもみやびちょう}の外堀通りと
目白通りが交差する飯田橋交差点から、杉並区高
円寺南環七通りの大久保通り入口交差点に至る約
8.5km の都道の通称である。

この道は、江戸時代から元々存在していた JR
総武線大久保駅付近より東側の道と、昭和になっ
てから新たに整備された中野区側の道が繋がって
できた道である。

名称と道筋

「大久保通り」の名前は、新宿区に古くから存
在する「大久保」という地名に由来する。地名の

由来は、「小田原北条氏家臣太田新六郎の寄子衆
に大久保姓の者がおり、領主であった」、「この
地にある永福寺の古い山号大窪山からとった」、
「江戸期の東大久保・西大久保の境に大きな窪
地があったため大窪村と言い、後に今の字に改
まった」、「江戸幕府から当地に屋敷地を給された
^{ひゃくにんぐみどうしん}百人組同心総取締が大久保某による」等の諸説
がある。

文化 10 年に刊行された『江戸名所花暦』とい
う文献には「尾州侯のお屋敷の脇大久保通りへ出
る道筋」と記載されており、現在の大久保駅より
東側は、江戸時代後期には既に大久保通りと呼ば
れていたと考えられる。当時の道筋は、堀江家文
書の「西大久保村絵図」や「市ヶ谷牛込絵図」と
いった史料に描かれているが、名称などの記載は
見られない。

また、「内藤新宿 千駄ヶ谷絵図」という史料に
は、淀橋や中野長者と呼ばれた鈴木九郎ゆかりの
「十二社権現」^{じゅうにそうごんげん}（現・西新宿）と大久保地域をつな
ぐ道に「大久保道」と書かれており、こちらの道
も「大久保」の名前で呼ばれていた可能性が推測
できる。



西大久保村絵図。中央を東西に走る道が現・大久保通りの原形。
所蔵：東京都立大学図書館本館 堀江家文書 S106



江戸切絵図（内藤新宿千駄ヶ谷絵図）の北西部分に
「大久保道」の文字が見える。

出典：『江戸切絵図』内藤新宿千駄ヶ谷絵図 景山
致恭〔ほか〕 / 編，尾張屋清七，1849-62 年（国立
国会図書館デジタルコレクションより一部切り抜き）



明治 44 年、中野町全図。整備前の桃園川周辺には、東西をつなぐ道が無かった。
所蔵：公益財団法人特別区協議会



昭和 3 年 最新交通指導地図豊多摩郡中野町。
所蔵：東京都立中央図書館

大久保地区の発展

名称の由来となった大久保地区にある大久保通りは、もともと道幅も狭く車と車がようやくすれ違える程度の幅員しかなかった。明治 22 年に認可された都市計画「東京市区改正設計」にて、「大久保通り」の前身となる第 4 等道路（幅員 8 間以上 10 間以下の道）の、「第三十五、^{うしごめあげばちよう}牛込揚場町第二等線より津久戸前町に至り、左折して^{さかなまち}肴町・^{やまぶしちよう}山伏町通り、原町等を経て、戸山學校に至る」路線の整備が計画された。

昭和になると大久保通りは拡幅され、乗合自動車（現在でいうバス）も通るようになる。大正 14 年の『大日本職業別明細図之内 大久保町淀橋町代々幡町千駄ヶ谷町戸塚町』という地図を見ると、大久保通り沿いに商店が多く並び、商店街として賑わい発展してきた様子がうかがえる。これには、大久保通りに明治 28 年 5 月に開業した「甲武鉄道（後の中央線）大久保駅」と、大正 3 年 11 月に開業した「山手線新大久保駅」の 2 つ

の駅の存在が大きいと思われる。

大久保～新大久保周辺が更に変わりはじめたのは、昭和末期である。南米系、中国系の人々の流入に続き、韓国系がそれにとって代わると、アジア系の人々の需要に応えるように、飲食店、雑貨屋などが軒を並べるようになった。今や大久保通り一帯は、多国籍な雰囲気が出た地域の景観を特徴づけている。

中野区内の整備

昭和 2 年の都市計画で、大久保通りの中野区内を通る「豊多摩郡淀橋町柏木」から「豊多摩郡杉並町高円寺」までの区間は、「補助線 42 号」として桃園川に沿った形で計画され、昭和 3 年測量の 1 万分の 1 地形図などには既に道が出来ている様子が確認できる。

また、昭和 4 年に中野町議会で字名地番改正が議決され、大久保通りの道を中心とした地域に「^{みやそのどおり}宮園通」という町名がつけられた。これは、氷

川神社の前にあたる旧町名の「宮前」を起点として「桃園」に至る通りである事に由来する。

区画整理事業によって新しく作られた中野区内の宮園通りと、新宿区内を通る江戸時代からの道である大久保通りが連結されたのは昭和 10 年代に入ってからであった。国土地理院が保有し、撮影時期が判明している空中写真の中では一番古い昭和 11 年頃の空中写真では、大久保地区から中野区内を通る大久保通りが連結されていることがわかる。成立の歴史や過程がまったく異なる 2 つの道路が繋がり、現在の大久保通りの原形ができあがったのである。

中野区内を通る大久保通りは、区画整理事業によって新規に成立した道路であり、杉並区内の部分もその後の延長である。『中野区区勢総覧』によると、昭和 14 年の「中野区内土地区画整理（耕地整理）地区一覧図」に、大久保通りが「中野第一」として区画整理地区に設定されていることがわかる。



昭和 11 年、中野区宮園町付近。工事前。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 11 年、宮園通り大正バス道路。工事中。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 12 年、宮園通り大正バス通路。竣工。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 12 年、末広橋付近。竣工。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター

年表

年月日		できごと
室町時代		中野長者と呼ばれた鈴木九郎が、故郷である紀州の熊野三山より十二所権現をうつし祠った（現・新宿十二社熊野神社）。
江戸時代		大久保から南に淀橋や、「十二社権現」に向かう道が「大久保道」と呼ばれる。
天保 12（1841）年		桃園川が荻窪、天沼の湧き水を水源に善福寺川から水を引いて分流になる。
明治 17（1884）年		桃園川は石神井川と呼ばれる。 川幅 2 間（約 3.6 m）延長 1,570 間（約 2,850 m）。
明治 22（1889）年		「東京市区改正設計」が認可され、第 4 等道路の「第 35」が後の「大久保通り」となる。
明治末		明治末には外堀通りには市電が通り、また図上方の谷間の道を拡幅して市電を走らせ、単筒町、山伏町などの停留所をつくった（現在の大久保通り）。市（都）電は戦後の高度成長期に廃止された。
明治 36（1903）年		新宿・半蔵門間の市電開設。
大正 12-昭和 6（1923-31）年		関東大震災後、河川改修工事により桃園川の流路が整えられる。
昭和 2（1927）年		都市計画で、大久保通りの中野区内を通る区間（「豊多摩郡淀橋町柏木」から「豊多摩郡杉並町高円寺」）は、補助 42 号として桃園川に沿った形で計画される。
昭和 3（1928）年		1 万分の 1 地形図で、既に大久保通りの道が出来ていることが確認できる。
昭和 4（1929）年		中野町で字名地番改正が議決され、大久保通りの道を中心とした地域に「宮園通」という町名がつけられる。
昭和 14（1939）年		「中野区内土地区画整理（耕地整理）地区一覧図」に、大久保通りが「中野第一」として区画整理地区に設定されている。
昭和 21（1946）年	4 月 25 日	戦災復興院告示 15 号により、都市計画道路「補助線街路第 71 号線」となる。
昭和 36（1961）年		桃園川の暗渠化工事が始まる。
昭和 37（1962）年		東京都により、新宿区下宮比町（飯田橋）都道 17 千代田練馬田無線と都道 10 号線の交点から杉並区高円寺二丁目都道 10 号線と都道 159 線の交点までの区間の通称名が「大久保通り」となる。
昭和 42（1967）年		桃園川暗渠化工事終了。 蓋かけ後、順次、遊具や植栽整備し、遊び場として利用される。
昭和 60-平成 6（1985-94）年		桃園川暗渠上、緑道化整備。
平成 23（2011）年	5 月 2 日	桃園川緑道が、中野区により公園として告示される。



昭和 50 年頃の大久保通り。中央 2 丁目 22 付近。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ

ほうなんどおり 方南通り

都道 14 号 新宿国立線

都市計画道路 補助線街路第 62 号線

「方南通り」は、新宿区の西の外れ、都営地下鉄大江戸線西新宿五丁目駅あたりを始点に、渋谷区最北端の本町三丁目^{ほんまち}を通り、中野区を横断し、杉並区で井ノ頭通りに行きあたって終点となる約 5km の道路である。

歴史的背景

方南通りの元となる道は、中野区内では、「本郷道（現在の本郷通とは異なる）」や「雑色道」と呼ばれた道の一部がそれにあたる。杉並区側にも元となる道があり、「大宮八幡通り」あるいは「八幡通り」と呼ばれていた。しかし、この 2 つの道を直線的に繋ぐ、南台 3 丁目の南台図書館付近から丸ノ内線方南町駅付近までの区間は通じておらず、一旦南側に折れて角田橋を渡る経路が利用されていたと考えられる。

大正 5 年に出版された『東京府豊多摩郡誌』には、「大宮横丁道」のルートとして「淀橋町甲州街道筋大宮町横より分岐し、本町字雑色を経て和田堀内村にて井の頭道に合す」との記述があ

る。これは、現在のルートと重なる部分が多く、方南通りが古くから使われてきた道であることが想像できる。とはいえ、この頃の道幅は狭く、2.5 間（約 4.5m）程度だったようだ。

大正時代に雑色村（現・南台）で子供時代を送った著者が書いた『雑色風土記』にて、当時の地域の様子を知ることが出来る。大正 10 年頃は「36 軒の百姓と一軒の店の外はすべて畑と森と田んぼだけ」だったことや、新宿から著者の家の櫓の大木が見えたことなどが書かれており、当時の南台周辺は田畑と森に囲まれたのどかな土地だったことがわかる。大正 12 年の関東大震災後、焼け出された住民が移動してきたことで、この地域の人口が増えていった。

都市計画と道路整備の進展

昭和 2 年、東京都市計画道路網にて認定された「補助線道路 34 号線」が後の「方南通り」となる。6 年、中野町と野方町が合併して中野区になる前に行われた町名整備・字名改正に合わせて、区内で新たな道路を「栄町通り」という通称名にすることが決定し、沿道となる予定の町が「栄町通 1 ～ 3 丁目」と名付けられた。

昭和初期の野方や方南町の様子を伝える『走馬燈』では、杉並区側の大宮八幡通りについて「立派な通り」と記述されている。計画された路線はこの大宮八幡通りの規模にあわせて道を整備しようとしたようだが、なかなか完成に至らず戦前の地図では計画路線として点線で示されていること



昭和 15 年、補助 34 号線工事前の中野区多田町。東京高等学校西側より東方を望む。

提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 15 年、補助 34 号線工事前の中野区多田町。補助 29 号交叉より東方を望む。

提供：東京都土木技術支援・人材育成センター

が多い。

その後、戦況が悪化したこともあり、工事は大幅に遅延した。終戦後の昭和21年4月に「戦災復興都市計画街路」に指定されたことでようやく工事が本格化し、昭和22年には開通したようである。39年には主要地方道に指定されており、地域で主要な役割を担っている道であることがわかる。

戦後の方南通りと周辺地域

のどかな雰囲気だった周辺地域は、昭和28年には杉並区側に現在の商店街の前身である方南銀座商店会が発足し、36年には中野車両基地、翌37年には丸ノ内線方南町駅が開業するなど、装いを大きく変えていった。

42年に中野区の住居表示が実施されると、町名の「栄町通」は姿を消して「南台」となった。



昭和16年、補助34号線工事中。中野区多田町。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター

道路の通称名として「栄町通り」の名は残っていたと思われるが、59年に「方南通り」と改められるまでの間にどのような名称で呼ばれていたかについては記録が見つからない。あるいは他の名前で呼ばれていた可能性も考えられる。なお、「方南」という名称は、古くから杉並区に存在していた地名である。

元々の計画幅員は20mだが実際には15mであり、延長計画も終わっておらず、令和7年3月5日時点で中野区側の完成率は18%、杉並区では5年3月時点で86.7%と、地域ごとの進捗には大きな差がある。杉並区側の方が完成率が高いのは、元々参道として整えられた道であったことが要因として考えられ、原形となった道路の地歴を感じさせられる。



昭和17年、補助34号線旧景淀橋区栄町三丁目（中野区栄町通り3丁目と思われる）。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



平成2年、方南通り。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



平成27年頃、方南通りの東大付属前交差点。
写真：職員撮影

年表

年月日		できごと
大正 5(1916) 年		『東京府豊多摩郡誌』にて方南通りの原形と思われる「大宮横町通り」、「本郷道（現在の本郷通とは異なる）」、「雑色道」の記載が見られる。
昭和 2(1927) 年		東京都市計画道路網にて補助道路 34 号線として設定される。
昭和 6(1931) 年		町名整備や字名改正に合わせて、栄町通りという通称と町名が付けられる。
昭和 8(1933) 年		「火災保険特殊地図」では、栄町通り 3 丁目部分はほぼ水田となっている。
昭和 20(1945) 年		地図上で栄町通り 3 丁目部分は点線となっており、未開通であると思われる。
昭和 21(1946) 年	4 月 15 日	戦災復院告示第 15 号にて、都市計画道路の補助 62 号線と設定される。
昭和 22(1947) 年	3 月以前	この時期発行と推定される地図では、全線開通していることになっている。
	11 月 26 日	補助 62 号線の幅員が 20 m に変更される。
昭和 36(1961) 年		地下鉄の中野車両基地設立。
	3 月 15 日	道路法に基づき、新宿区淀橋町 21 号線交点から杉並区上高井戸 5 丁目杉並府中線交点までが都道 22 号と認定される。
昭和 37(1962) 年	3 月	方南町駅開業。
昭和 39(1964) 年	12 月 28 日	都道 22 号の一部が主要地方道に指定される。
昭和 41(1966) 年	4 月 1 日	東京都告示第 253 号にて、都道の「14 号新宿府中線」として認定。渋谷区本町 3 丁目から府中市是政通りまでの区間と区域決定した。
昭和 42(1967) 年	6 月	該当地域の住居表示実施により、町名の「栄町通」が「南台」となる。
	9 月	「都市計画街路事業現況図」では方南通りの整備状況について、渋谷区部分は事業中、中野区部分は拡張計画中、杉並区部分は概ね整備済みで一部事業中となっている。
昭和 59(1984) 年	4 月 13 日	鈴木都知事の提唱する「マイタウン東京構想」を機に、「方南通り」と通称が改められる。
	5 月 1 日	東京都により、渋谷区本町 3 丁目都道 317 号（山手通り）との交点から杉並区大宮 2 丁目都道 413 号（井ノ頭通り）との交点までの区間が「方南通り」という通称名に決定。
平成 26(2014) 年		渋谷区から現在の新宿区熊野神社前交差点に始点が変更される。
令和 7(2025) 年	3 月 5 日	中野区部分は一部完了一部事業中で、完成率 18%。

せんかわどおり 千川通

都道 439 号 椎名町上石神井線
都市計画街路 補助線第 229 号線

年表

年月日		できごと
		練馬区役所付近より東側の道が「清戸道」と呼ばれる。
元禄 9 (1696) 年		千川徳兵衛、太兵衛により千川上水が完工。
享保 7 (1722) 年		千川上水廃止。田用水としてのみ利用される。
安永 8 (1779) 年		上水の再興。
文化3-天保8 (1806-1837) 年頃		堀江家文書「中村絵図」にて、「仙川堀」（千川と思われる）に沿った道が描かれている。
明治 13 (1880) 年		岩崎弥太郎の立案により、千川水道株式会社が創設される。
明治 41 (1908) 年		千川水利組合が結成。千川水道会社は解散となる。
大正 9 (1920) 年	4 月 1 日	起点北豊島郡板橋町から終点北多摩郡武蔵野村吉祥寺の区間が「府道第 122 号板橋吉祥寺線」と認定される。
昭和 2 (1927) 年	8 月 18 日	「北豊島郡中新井村大字中新井」から「北豊島郡石神井村大字上石神井」の区間が都市計画道路の補助線道路 45 号線として計画される。
昭和 27 - 41 (1952 - 66) 年頃		千川上水暗渠工事開始。
		八成橋から九頭龍橋（現・上鷺宮 4 丁目、富士見台駅前五差路付近）の間、上水の北側にあった道は、庚申塔があったことから、暗渠化されるまで庚申道と呼ばれる。
昭和 32-36 (1957-1961) 年		中野区内の区間の千川上水の暗渠工事が行われる。
昭和 36 (1961) 年	3 月 15 日	道路法に基づき、起点板橋区板橋町 5 丁目国道 17 号線交点から終点練馬区上石神井 1 丁目東京所沢線交点までが、都道 95 号として認定される。
昭和 40 (1965) 年	4 月 1 日	都道が整理され、都道 439 号椎名町上石神井線と認定される。
昭和 41 (1966) 年	7 月 30 日	建設省告示第 2428 号により、都市計画道路補助第 229 号線として設定される。
昭和 45 (1970) 年	1 月 1 日	東京都水道局が千川上水からの取水を中止。
昭和 59 (1984) 年	5 月 1 日	東京都によって道路の通称名が「千川通り」と設定される。 区間は「豊島区南長崎 6 丁目都道 420 号との交点」から「練馬区上石神井 1 丁目都道 5 号（青梅街道）との交点」まで。



昭和 27 年頃、千川上水・富士見台 1 丁目の九頭竜橋。
提供：練馬区



昭和 27 年、千川上水。上鷺宮 4 丁目 12 番付近。
提供：練馬区

めじろどおり 目白通

都道 8 号千代田練馬田無線
都市計画道路 放射第 7 号線

年表

年月日		できごと
		道の一部が「清戸道」と呼ばれる。
昭和 2 (1927) 年	8 月 18 日	「豊多摩郡戸塚町大字下戸塚郡市界」から「豊多摩郡大泉村大字小樽北多摩郡界」の区間が都市計画道路の幹線放射道路 7 号線として計画される。
昭和 12 (1937) 年		区画整理に伴い通称十三間道路の工事が始まる。昭和 13 年、中野にかかる区間が完成。
昭和 21 (1946) 年	4 月 25 日	戦災復興院告示 3 号にて、都市計画道路の放射 7 号線と改めて設定される（中野区を通る区間）。
昭和 29 (1954) 年	1 月 20 日	新道路法に基づき、主要な地方道が指定される。 東京練馬田無線が該当の路線。
昭和 30 (1955) 年	12 月 15 日	都道 17 号千代田練馬田無線と認定される。
昭和 37 (1962) 年	4 月 25 日	東京都によって道路の通称名が「目白通り」と設定される。 区間は「千代田区九段 1 丁目」から「北多摩郡田無町」まで。
昭和 38 (1963) 年	12 月 16 日	都市計画道路の放射第 7 号線が、「オリンピック道路第 1 号」として全通。
昭和 41 (1966) 年	4 月 1 日	都道の再編成が行われ、都道の整理番号が変更される。 17 号千代田練馬田無線は 8 号へ変更。
昭和 58 (1983) 年	3 月 31 日	都道 8 号線の練馬区向山四丁目から同区谷原 1 丁目までの区間が廃止となる。



昭和 12 年、放射 7 号線工事中。江古田付近。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 13 年、放射 7 号線竣工。江古田町二丁目にて西方を望む。
提供：東京都土木技術支援・人材育成センター



昭和 37 年、中杉通り鷺宮商明会商店街。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ



昭和 37 年、新青梅街道と中杉通りの交差点。
出典：でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ

なかすぎどおり 中杉通り

都道 427 号瀬田貫井線
都市計画道路 補助線第 133 号線

年表

年月日		できごと
1800 年代？ (正確な年代不明)		江戸時代の上鷺宮村、下鷺宮村（現・上鷺宮、鷺宮、白鷺、若宮周辺）の絵図から、現在の中杉通りの位置に「高井戸道」という道が確認できる。
明治 13（1880）年		日本陸軍作成の『迅速測図』にて、区内経路に関しては現在と同じ道筋を確認できる。
大正 9（1920）年	4 月	東京府告示第 162 号により「東京府道第 172 号 調布浦和線」との路線名で認定される。
大正 11（1922）年	7 月 15 日	阿佐ヶ谷駅開設。
昭和 2（1927）年	4 月 16 日	西武鉄道村山線（現・西武鉄道新宿線）が開業、鷺ノ宮駅開設。
	8 月 18 日	東京都区別都市計画委員会が計画区域全域（現在の 23 区に相当）に対する都市計画道路網を告示。 中杉通りは「補助線道路 38 号」として、幅員 11 m で計画される。 この時点で、道路は舗装されていた。
		鷺ノ宮駅北口から続く道（現・中杉通り）に商店ができ始める。鷺宮商明会商店街の始まりといわれる。
昭和 5-10（1930-35）年		鷺ノ宮駅北口の商店の数が増え、生活必需品を扱う店が揃うようになる。
昭和 10（1935）年頃		道幅が広がり、歩道ができ、バスが通り始める。
戦中		一部の歩道に防空壕が掘られる。
昭和 20（1945）年		東京大空襲後に阿佐ヶ谷駅の南北に防火地帯が設けられる。建物は取り壊され、土がむき出しの「黒い道」ができる。戦後、「黒い道」にはバラックが立ち並び、青空市場となる。
昭和 27（1952）年		「黒い道」をそのまま道路として整備。阿佐ヶ谷駅南口から青梅街道までの区間が開通。
昭和 36（1961）年	3 月 15 日	都道 93 号本町田相模原線の一部、128 号青梅武蔵線に認定。
昭和 38（1963）年	6 月 18 日	道路通称名が「中杉通り」に正式決定。
昭和 40（1965）年	10 月 9 日	都道 427 号用賀貫井線に認定。
昭和 41（1966）年	7 月 30 日	建設省告示第 2428 号により、中杉通りは都市計画道路補助第 133 号線として計画し直される（幅員 16 m）。
昭和 42（1967）年	7 月 29 日	都道 427 号瀬田貫井線に名称変更。
昭和 59（1984）年	5 月 1 日	杉並区阿佐ヶ谷北 1 丁目から 4 丁目まで経路変更。
平成 16（2004）年	3 月	補助第 133 号線の中野区白鷺 2 丁目～練馬区中村北 3 丁目区間 2,380m が「区部における都市計画道路整備方針」における優先整備路線（平成 16 年度～ 27 年度の間に優先的に整備すべき路線）に指定される。
	3 月 16 日	中野区議会建設委員会にて、都市計画道路補助 133 号線（中杉通り）の鷺ノ宮駅以南、杉並区境までの事業化計画路線に反対する陳情が寄せられる。
平成 25（2013）年		杉並区境から八幡橋の区間約 700 m について、整備事業の着手が決定。
平成 25（2013）年	10 月 22 日	事業着手に向けた測量を実施するにあたり、東京都第三建設事務所が事業の概要や測量について若宮小学校にて説明会を実施。
平成 27（2015）年	3 月 31 日	杉並区阿佐ヶ谷北 6 丁目～中野区白鷺 1 丁目区間が 2 車線、幅員 16 m で整備事業認可。
令和 7（2025）年 現在		用地取得に時間を要しており、現在も上記区間整備中。



写真：職員撮影

中野上空の道

空に目を向けてみると、実は中野区上空にも道が存在している。

令和2年3月29日より運用開始した、羽田空港への新飛行経路によって、飛行機が中野駅の真上を飛ぶルートができた。飛行機は向かい風の中で着陸するため、中野上空が南風の場合に限り15時～19時の間、中野区の北西から南東にかけて通過する。

羽田空港着陸に向けた飛行機が、「野方駅」「中野駅」「新中野駅」「中野新橋駅」の上を順に、高度4,000～3,000フィート（約1,200～900m）の低空飛行で飛ぶ。さらに悪天候時には、先のルートに加えて、東側に並行したルートが採用され、「新江古田駅」「東中野駅」を通過し、新宿駅の真上を通る。

令和7年現在の飛行経路では、常に2ルートが同時進行となる。そのため、中野駅付近からは、各ルートを飛行する飛行機をそれぞれ目視で確認することができる。



【新飛行経路案】好天時（南風時 15時から19時までの到着経路）



【新飛行経路案】悪天時（南風時 15時から19時までの到着経路）

中野区ホームページ「羽田空港（東京国際空港）の新飛行経路について」（2025年2月13日更新）より転載

展示風景



展示全景



展示地図



ポスター



ガラスケース展示

明治の中野と比べてみよう！

国立療養所 中野病院

大正9年に「東京市療養所」として開所され、結核治療を担った。
昭和22年厚生省に移管し「国立中野療養所」となり、42年「国立療養所中野病院」と改称。
平成5年の統合により廃止。

野方給水塔

東京の人口増加により23区北西部への配水を目的として昭和4年に竣工。
昭和41年まで上水道の配水塔、平成17年まで災害用応急貯水槽だった。
平成22年、国登録有形文化財登録。

中野刑務所

明治43年～昭和58年まで存在。
大正4年に完成した後藤慶二氏設計の新獄舎は「大正時代の名建築」といわれ、赤レンガ表門のみ現存している。
大正～昭和初期には思想犯が収容された。

新井薬師 梅照院

1586年創建、中野区最大の寺院。
正式名称は新井山梅照院聖王寺。
「東の浅草寺、西の新井薬師」と称された。
早稲田通りから分岐する梅照院までの参詣道「薬師柳通り」が今も残る。

犬小屋／区役所／サンブラザ

この場所には、江戸時代に大規模な犬小屋「御囲い(おかこい)」があった。
その後、陸軍鉄道大隊、電信隊、陸軍中野学校、警察大学校へ変わり、現在、旧中野区役所や閉館した中野サンブラザが並ぶ。

鍋屋横丁

鍋横という通称で親しまれる商店街。
江戸時代前期から、堀之内妙法寺に向かう参道として利用された。
青梅街道から参道へ曲がる目印に鍋屋があったことからこの名が付いた。

凡例

- … 寺社
- … 産業
- … ランドマーク
- … 公園
- … 現在の道
- … 河川

国土地理院所蔵：第一軍管地方2万分1迅速測図原図（フランス式彩色図）

※この地図は、明治13年から19年にかけて作成された通称「迅速測図」と呼ばれる地図です。本来、複数枚に分かれている地図をつなぎ合わせて、中野区とその周辺の様子を一覧できるように作成しました。

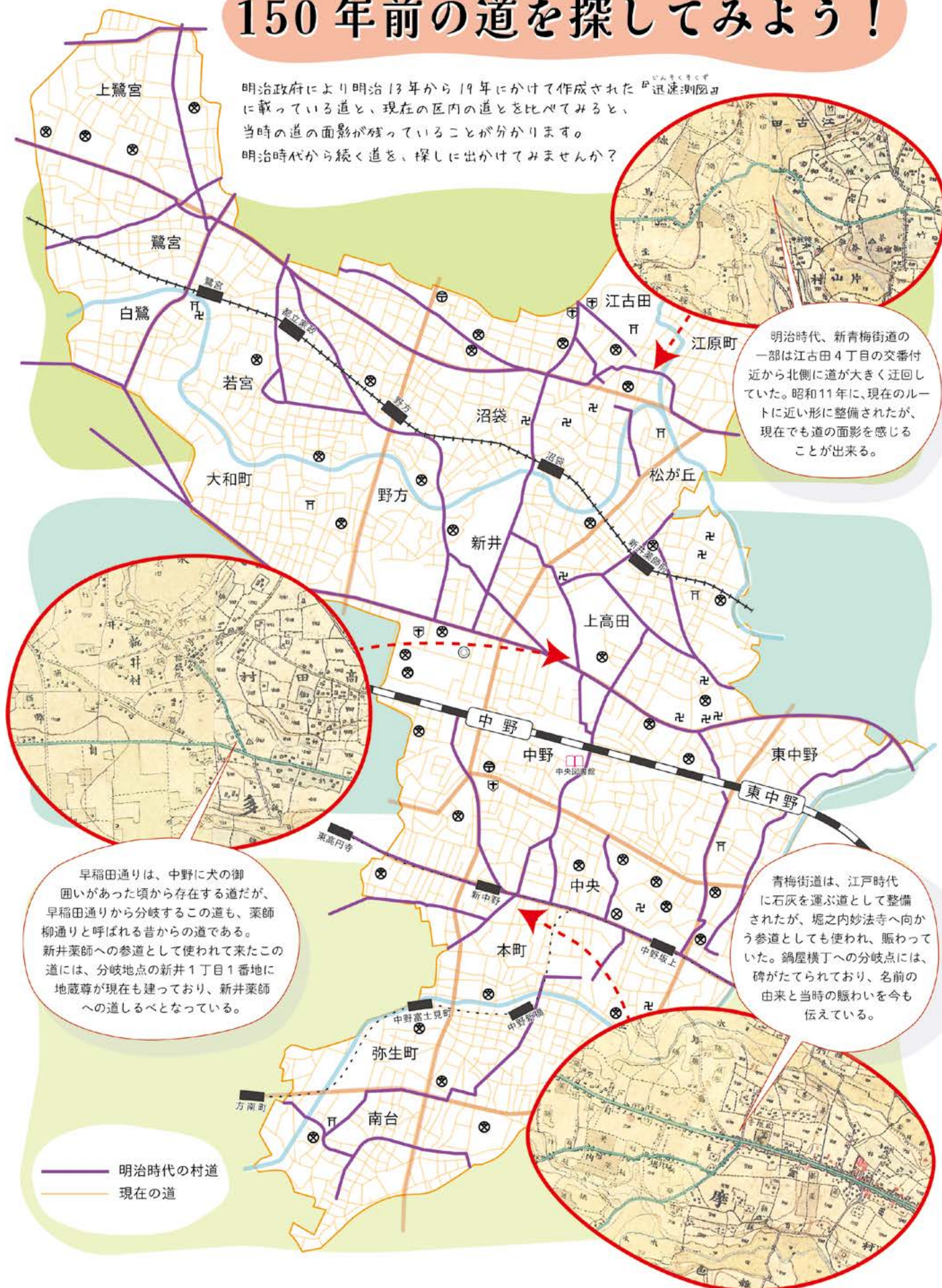
地図記号

- 府県道
- 村道
- 騎小径
- 徒小径

参考文献：
『兵要測量軌典 小地測量之部』

150 年前の道を探してみよう！

明治政府により明治13年から19年にかけて作成された^{じんそくきんぐ}迅速測図^{しんそくそくず}に載っている道と、現在の区内の道とを比べてみると、当時の道の面影が残っていることが分かります。明治時代から続く道を、探しに出かけてみませんか？



明治時代、新青梅街道の一部は江古田4丁目の交番付近から北側に道が大きく迂回していた。昭和11年に、現在のルートに近い形に整備されたが、現在でも道の面影を感じることが出来る。

早稲田通りは、中野に犬の御囲いがあった頃から存在する道だが、早稲田通りから分岐するこの道も、薬師柳通りと呼ばれる昔からの道である。新井薬師への参道として使われて来たこの道には、分岐地点の新井1丁目1番地に地蔵尊が現在も建っており、新井薬師への道しるべとなっている。

青梅街道は、江戸時代に石灰を運ぶ道として整備されたが、堀之内妙法寺へ向かう参道としても使われ、賑わっていた。鍋屋横丁への分岐点には、碑がたてられており、名前の由来と当時の賑わいを今も伝えている。

— 明治時代の村道
— 現在の道

参考文献リスト

請求記号の記載がない資料は、原則中野区立図書館で所蔵していない資料です。

道に関する参考文献				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
東京府史：府会篇 第4巻	東京府 / 編	東京府	1931	B23/D/4
日本の道路 122万キロ大研究	平沼 義之 / 著	実業之日本社	2021	685.2/ ヒ
ふしぎな国道	佐藤 健太郎 / 著	講談社	2014	685.2/ サ
現行警視庁東京府令規全集 第2綴	帝国地方行政学会 / 編	帝国地方行政学会	1920	—
日本の道路：建設双書 6	建設省大臣官房広報室 / 編	建設広報協議会	1964	—
日本道路史年表：明治元年(1868)- 昭和40年(1965)	日本道路協会日本道路史編纂委員会 / 編	日本道路協会	1972	—
東京都通称道路名設定委員会報告書	東京都建設局道路管理部路政課 / 編	東京都	1984	—

雑誌記事				
題名	著者名	掲載誌	年月	ページ
東京の幹線道路形成の史的研究	堀江 興 / 著	都市計画論文集 17 (0)	1982.10	427-432
東京の戦災復興街路計画の史的研究	堀江 興 / 著	土木学会論文集 (407)	1989.7	47-56
東京の市区改正条例（明治時代）を中心とした幹線道路形成の史的研究	堀江 興 / 著	土木学会論文報告集 (327)	1982.11	115-127
東京都市計画の百年（道路計画と土地利用計画）	寺西 弘文, 大崎 本一 / 著	土木計画学研究・講演集 No. 15(1)	1992.11	897-904

官報	
	出典
明治2年1月20日 太政官布告 箱根始メ諸道関門ヲ廃ス	『太政官日誌』明治2年 第1 - 10号 太政官, 慶4- 明9
明治6年12月20日 第413号達書 府県	『太政官日誌』明治6年 第132 - 166号 太政官, 慶4- 明9
明治9年6月8日 第60号達書 府県	『太政官日誌』明治9年1 - 6月 太政官, 慶4- 明9
明治18年2月24日 内務省告示第6号	—
昭和2年8月18日 内務省告示第409号	—
昭和27年6月10日(号外第59号) 法律第180号 道路法	—
昭和29年1月20日(号外第2号) 建設省告示第16号	—
平成11年7月16日(号外第135号) 法律第100号 国土交通省設置法	—

東京都公報
大正9年4月1日号外 告示第162号 府縣道ノ路線認定

インターネット情報	
東京都建設局 道路台帳作成要領(平成31年3月)	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/road/kijunten
でじなか ちいきの写真と図書のアーカイブ	https://archive.nakano-library.jp/

青梅街道				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野町誌 全	中野町教育会 / 編	中野町	1933	M25/A
中野区史 上巻	中野区 / 編	中野区	1943	M25/A/1
中野区史 昭和編 1	中野区 / 編	中野区	1971	M25/A/1
青梅街道周辺地域：中野区民俗調査第 3 次報告	中野区教育委員会 / 編	中野区	2003	P2/A
鍋横物語 見たい聞きたい記録したい	なべよこ観察隊 / 編	鍋横観察隊	2018	M15/A
走馬燈	田中 英俊 / 著	白日社	2009	N80/A
東京都都市計画概要 1973	東京都首都整備局 / 編	東京都	1974	E11/D/73
青梅歴史物語	青梅市教育委員会 / 編	青梅市	1989	M25/C33
青梅街道：江戸繁栄をささえた道	山本 和加子 / 著	聚海書林	1984	N50/D
武蔵野歴史地理 第 2 冊	高橋 源一郎 / 著	有峰書店	1971	N50/D/2
歴史の道調査報告書 第三集：青梅街道	東京都教育庁生涯学習部文化課 / 編	東京都	1995	N50/D
江戸近郊道しるべ	村尾嘉陵 / [著], 朝倉治彦 / 編注	平凡社	1985	N61/D
東京の道事典	吉田之彦 / 編, 渡辺晋 / 編, 樋口州男 / 編, 武井弘一 / 編	東京堂出版	2009	E67/D
青梅街道を歩く	筒井 作蔵 / 著	街と暮らし社	2007	N50/D
東京風土図 城南・城西編	サンケイ新聞社 / 編	社会思想社	1978	N50/D
多摩の街道 上	—	けやき出版	1999	N69/D/1
東京淀橋誌考	加藤 盛慶 / 著	武蔵郷土史料学会	1931	M25/B04
青梅市史 上巻 増補改訂	青梅市史編さん委員会 / 編	東京都青梅市	1995	M25/C33/1
東京府史 行政篇 第 4 巻	東京府 / 編	東京府	1936	B23/D/4
近世日本における石灰の生産流通構造	川勝 守生 / 著	山川出版社	2007	573.8/ カ
日本の道路 122 万キロ大研究 増補改訂版	平沼 義之 / 著	実業之日本社	2021	685.2/ ヒ
現行警視庁東京府令規全集 第 2 綴	帝国地方行政学会 / 編	帝国地方行政学会	1920	—
わが国の道路 昭和 56 年度版	「わが国の道路」刊行委員会 / 企画・編纂	産経出版	[1981]	—
中野そばの歴史と青梅街道				
中野町誌 全	加藤 盛慶 / 著	武蔵郷土史料学会	1934	M25/A
中野区民生活史 第 1 巻	中野区民生活史編集委員会 / 編	中野区	1982	M25/A/1
商店街からたどる“なかの”の足跡 PART2	中野区立中央図書館 / 編	中野区	2007	D82/A
東部地区 昔をたずねて	青少年育成東部地区委員会環境部 / 編	青少年育成東部地区委員会	1993	N65/A
中央線がなかったら 見えてくる東京の古層	陣内 秀信, 三浦 展 / 編著	NTT 出版	2012	M25/D
そばの本	植原 路郎, 薩摩 卯一 / 共編	柴田書店	1976	596.3/ ウ
蕎麦辞典 改訂新版	植原 路郎 / 著	東京堂出版	2002	R383.8/ ウ
新聞記事				
見出し	掲載紙			
乙第七号	読売新聞 1877 年 1 月 22 日 朝刊 2 頁			
六大道路改修	朝日新聞 1917 年 12 月 9 日 東京 朝刊 4 頁			
環状放射道路	朝日新聞 1920 年 10 月 11 日 東京 朝刊 2 頁			
市営自動車危険だとて中野が道路拡張請願	朝日新聞 1924 年 4 月 5 日 東京 朝刊 6 頁			
府下通信 中野町	朝日新聞 1924 年 6 月 14 日 東京 朝刊 6 頁			
府下通信 中野町	朝日新聞 1924 年 7 月 2 日 東京 朝刊 6 頁			
キケン道路	朝日新聞 1925 年 3 月 4 日 東京 朝刊 6 頁			
都心から放射状に二階式の高速自動車専用路 帝都の交通緩和策	朝日新聞 1938 年 11 月 3 日 東京 夕刊 2 頁			
青梅街道を本舗装	朝日新聞 1964 年 1 月 21 日 東京 朝刊 16 頁			
奥多摩温泉郷 湖底に沈んだ温泉復活 (るぽ・多摩新名所) / 東京	朝日新聞 1994 年 9 月 13 日 東京 朝刊			

雑誌記事				
題名	著者名	掲載誌	出版年	ページ
鍋屋横丁	内田 駿一郎 / 著	工業用水 (465)	1997.6	51-55
水のこぼれ話	安見 昭雄 / 著	工業用水 (442)	1995.7	48-66

官報	
	出典
明治 9 年 6 月 8 日 第 60 号達書 府県	『太政官日誌』明治 9 年 1 - 6 月 太政官, 慶 4- 明 9
昭和 2 年 8 月 18 日 内務省告示第 409 号	—
昭和 21 年 3 月 26 日 戦災復興院告示第 3 号	—
昭和 29 年 1 月 20 日 (号外第 2 号) 建設省告示第 16 号	—

東京都公報	
大正 9 年 4 月 1 日 (号外) 東京府告示第 162 号 府縣道ノ路線認定	
昭和 30 年 12 月 15 日 東京都告示第 1058 号	
昭和 37 年 4 月 25 日 (号外) 公告 道路の通称名の設定	
昭和 41 年 4 月 1 日 (号外 49 号) 東京都告示第 257 号	

中野区報		
日付・号数	資料名	請求記号
昭和 39(1964) 年 2 月 15 日 第 216 号 3 面	『中野区報』縮刷版 NO.1 昭和 24 年 3 月～昭和 39 年 12 月	B82/A/1
昭和 39(1964) 年 5 月 17 日 第 219 号 3 面	『中野区報』縮刷版 NO.1 昭和 24 年 3 月～昭和 39 年 12 月	B82/A/1

地図				
資料名	編者名	出版者	出版年	請求記号
堀江家文書 (絵図) 二	—	中野区立中央図書館	1997	M8/A/2

インターネット資料	
東京都市整備局 東京都市計画道路 (幹線街路) の当初計画決定年月日及び告示番号の一覧	https://www.toshiseibi.metro.tokyo.lg.jp/inquiry/keikaku_madoguchi
東京都建設局 道路台帳作成要領 (平成 31 年 3 月)	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/road/kijunten
東京都建設局 第四建設事務所 管内道路一覧表	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jimusho/yonken/kanri/doro_list.html
日本法令索引	https://hourei.ndl.go.jp/#/detail?lawId=0000044822
東京都立図書館ホームページ 大江戸データベース 江戸自慢三十六興 堀之内淀はし水飴	https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_library/database/index.html?page=3&ky=&and_or=0&ca=
中野区ホームページ 「なかの物語 其の六 味噌・蕎麦・醤油・沢庵・製茶」	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/kanko/shiru/nakanomonogatari/sono6.html
国土交通省 令和 3 年度全国道路・街路交通情勢調査 一般交通量調査結果	https://www.mlit.go.jp/road/census/r3/index.html

山手通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区史 下巻 2	東京都中野区役所 / 編集	東京都中野区役所	1954	M25/A/2-2
中野区区勢総覧	中野区役所 / 編	中野区	1940	B32/A/40

中野区都市計画マスタープラン基礎調査 東中野地域現況特性課題シート	中野区都市計画部計画課 / 編	中野区	1996	E11/A/96
中野区都市計画マスタープラン 平成 21 年 4 月	中野区都市整備部計画分野 / 編	中野区	2009	E11/A
中野区内における都市計画道路の現況	中野区都市環境部都市計画室 / 編	中野区	1990	E67/A/90
東中野今昔ものがたり	岸 恒夫 / 著	—	2006	M25/A
東京府史 行政篇 第四巻	東京府 / 編	東京府	1936	B23/D/4
特別区町名町区総覧	特別区協議会 / 編著	時事通信出版局	2012	B29/D
東京の都市づくり通史 第 1 巻	東京都都市づくり通史編さん委員会 / 企画・編集	東京都都市づくり公社	2019	E10/D/1
東京の都市づくり通史 第 2 巻	東京都都市づくり通史編さん委員会 / 企画・編集	東京都都市づくり公社	2019	E10/D/2
東京都都市計画概要 1959	東京都建設局都市計画部 / 編	東京都都市計画協議会	1960	E11/D/59
東京都都市計画概要 1962	東京都都市計画協議会 / 編	東京都	1962	E11/D/62
東京都都市計画概要 1965	東京都都市計画協議会 / 編	東京都	1966	E11/D/65
東京都都市計画概要 昭和 42 年	東京都都市計画協議会 / 編	東京都	1968	E11/D/67
東京都都市計画概要 昭和 45 年	東京都首都整備局 / 編	東京都	1971	E11/D/70
東京都都市計画概要 1973	東京都首都整備局 / 編	東京都	1974	E11/D/73
東京都都市計画概要 1976	東京都都市計画局 / 編	都民生活局	1977	E11/D/76
東京都都市計画概要（資料編） 1976	東京都都市計画局 / 編	都民生活局	1977	E11/D/76
東京都都市計画概要 1979 年版	東京都都市計画局 / 編	東京都都市計画協議会	1980	E11/D/79
中野区内における都市計画道路の現況	中野区都市環境部都市計画室 / 編	中野区	1990	E67/A/90
中野区都市計画マスタープラン基礎調査 東中野地域現況特性課題シート	中野区都市計画部計画課 / 編	中野区	1996	E11/A/96
中野区都市計画マスタープラン 平成 21 年 4 月	中野区都市整備部計画分野 / 編	中野区	2009	E11/A
東京人 2022 年 2 月	—	都市出版	2022	ZG4/D/450
地形と歴史で読み解く鉄道と街道の深い関係	内田 宗治 / 編著	実業之日本社	2021	516.1/ ウ
東京の都市計画	越沢 明 / 著	岩波書店	1991	518.8/ コ
未完の東京計画	石田 頼房 / 編	筑摩書房	1992	518.8/ ミ
東京府道路概要	—	東京府土木部	1932	—
現行警視庁東京府令規全集 第 2 綴	帝国地方行政学会 / 編	帝国地方行政学会	1920	—
警視庁交通年鑑 昭和 38 年	—	警視庁交通部	1964	—
東京都通称道路名設定委員会報告書	東京都建設局道路管理部路政課 / 編	東京都	1984	—

新聞記事	
見出し	掲載紙
今夜半に開通 五輪道路の環状六号線	朝日新聞 1964 年 8 月 11 日 東京 朝刊 6 頁

官報
昭和 2 (1927) 年 8 月 18 日 内務省告示第 409 号
昭和 21 (1946) 年 3 月 2 日 戦災復興院告示第 3 号
昭和 39 年 12 月 28 日 建設省告示第 2320 号
昭和 46 (1971) 年 6 月 26 日 建設省告示第 1069 号

東京都公報
昭和 30 (1955) 年 12 月 15 日 東京都告示第 1058 号
昭和 37 (1962) 年 4 月 25 日 (号外) 公告 道路の通称名の設定
昭和 40 (1965) 年 4 月 1 日 東京都告示第 287 号
昭和 40 (1965) 年 10 月 9 日 東京都告示第 951 号
昭和 45 (1970) 年 4 月 13 日 東京都告示第 406 号
昭和 54 (1979) 年 8 月 10 日 東京都告示第 885 号
昭和 54 (1979) 年 8 月 10 日 東京都告示第 886 号
昭和 59 (1984) 年 5 月 1 日 公告 東京都通称道路名の設定

地図				
資料名	編者名	出版者	出版年	請求記号
中野区変遷地形図 第1分冊	国土地理院 / 作成	中野区立中央図書館	1994	M8/A/1
中野区変遷地形図 第2分冊	国土地理院 / 作成	中野区立中央図書館	1994	M8/A/2
豊多摩郡中野町全図	東京郵便局 / 編	人文社	1991	M8/A
中野町勢一覽 (東京府豊多摩郡中野町全図)	東京府豊多摩郡中野町 / 編	中野町	1933	—
番地入新大東京市三十五區分圖之内中野區詳細圖	坂西 慶次郎 / 著	坂西慶次郎	1933	—
中野区全域図 昭和8年	—	都市製図社	—	M8/A
最新中野區明細地圖	都築 庸二 / 製圖	東京日日新聞社	1939	—
大東京区分圖三十五區之内中野區詳細圖	東京地形社 / 編	日本統制地図	1941	—
コンサイス東京都35区分分地図帖	—	日地出版	1946	M8/B
中山道分間延絵図 第1巻 絵図編	—	東京美術	1976	—
東京都通称道路名地図	東京都建設局道路管理部 / 編	東京都	1984	E70/D

インターネット情報	
平成17年6月13日 中野駅周辺整備・交通対策特別委員会第2回定例会 資料 「環状6号線及び首都高速中央環状新宿線の整備に伴う交通・環境問題及び東中野駅付近広場整備計画について」	https://kugikai-nakano.jp/shiryou/1488114753.pdf
平成22年3月15日 中野区 建設委員会 資料 「山手通り拡幅整備事業の進捗状況について」	https://kugikai-nakano.jp/shiryou/14821151452.pdf
平成22年12月7日 中野区 建設委員会 資料 「山手通り沿いの風害対策について」	https://kugikai-nakano.jp/shiryou/1491184947.pdf
環状第6号線の整備について (アーバンインフラ・テクノロジー推進会議 第27回技術研究発表会)	https://www.uit.gr.jp/members/thesis/pdf/honb/471/471.pdf
東京都建設局 第二建設事務所 環状第6号線 (山手通り) 上目黒区間の事業完了のお知らせ 令和6年12月12日	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/kensetsu/kanrokukanryou

環七通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区史 昭和編 3	中野区 / 編	中野区	1973	N25/A/3
中野区中期計画 昭和58～62年	中野区企画部企画課 / 編	中野区	1983	B38/A/83
中野区中期計画 昭和60～64年	中野区企画部企画課 / 編	中野区	1985	B38/A/85
のがた地域ニュース 昭和53年～平成3年	中野区野方地域センター	中野区	1978	B83/A
環七自動車公害実態調査結果	中野区公害対策協議会 / 編	中野区	1979	F4/A/79
調査誌 わがまちの昔と今 第3号	中野自主グループ連合会調査部 / 編	中野自主グループ連合会調査部	1993	M25/A/3
大和町うるわし：東京都中野区大和町の歴史	大和地域歴史編纂委員会 / 編	中野区大和区民活動センター運営委員会	2015	M25/A
都史資料集成 II 第7巻：オリンピックと東京	東京都 (東京都公文書館) / 編	東京都 (東京都公文書館)	2018	B23/D/2-7
神田川・環状七号線地下調節池	—	東京都建設局	2019	E38/D
東京 都市計画物語	越沢明 / 著	日本経済評論社	1991	E11/D
東京の道事典	吉田 之彦, 渡辺 晋, 樋口 州男, 武井 弘一 / 編	東京堂出版	2009	E67/D
「環7対策」関連資料集	東京都都民生活局参加推進部 / 編	東京都	1980	F16/D
東京のれきし 道路・鉄道、まちづくり編	—	双葉社	2014	M25/D
ハダカの東京都庁	澤 章 / 著	文藝春秋	2021	318.2/ サ
図説 空と雲の不思議	池田 圭一 / 著	秀和システム	2017	451.6/ イ
環境汚染雲：いま都会の空が危ない	塚本 治弘 / 著	五月書房	1992	451.6/ ツ
地形と歴史で読み解く鉄道と街道の深い関係	内田 宗治 / 編著	実業之日本社	2021	516.1/ ウ
100万人の給排水	小川 正晃 / 編著, 瀬谷 昌男 / イラスト	オーム社	2015	528.1/ オ

一九六四年東京オリンピックは何を生んだのか	石坂 友司, 松林 秀樹 / 編著	青弓社	2018	780.6/セ
都市計画概要 2020	東京都都市整備局 / 編	東京都都市整備局	2020	—
建設進むオリンピック関連街路	東京都道路建設本部建設部計画課 / 編	東京都道路建設本部建設部計画課	1963	—
事業概要 昭和 41 年版	—	東京都建設局総務部庶務課	1966	—
東京都通称道路名設定委員会報告書	東京都建設局道路管理部路政課 / 編	東京都	1984	—

新聞記事				
見出し		掲載紙		
東京西辺を走るアーチ、環状 7 号線 五輪施設をつなぐ大動脈 15 日に開通 19 カ所で立体交差		朝日新聞 1964 年 8 月 12 日 東京 朝刊 15 頁		
環 7、半世紀ぶり全通 総建設費は 1 兆 2 千億円 計画、25 回も変更		朝日新聞 1985 年 1 月 17 日 東京 夕刊 1 頁		
環七・環八雲 強酸性、局地的な微雨（東京の空が危ない：3）／東京		朝日新聞 1998 年 11 月 18 日 東京 朝刊		
環七、青戸で式典、58 年ぶり全通。		日本経済新聞 1985 年 1 月 17 日 夕刊 13 頁		

雑誌記事				
題名	著者	掲載誌	出版年	請求記号
後藤新平と震災復興計画	越沢 明 / 著	東京人 1989 年 8 月号	1989	ZG4/D/23
幻の東京都市計画から東京大改造を考える	越沢 明 / 著	東京人 1989 年 9 月号	1989	ZG4/D/24
東京の環状道路	—	東京人 2022 年 2 月号	2022	ZG4/D/450
中野往来 新道 沼栄橋 開設記念碑	—	中野区歴史民俗資料館だより しいのき 第 73 号	2023	ZK53/A
東京都区部における都市計画変更に表示された道路の政策決定変遷に関する実証的考察	山下 保博 / 著	都市計画論文集 37 (0)	2002	—
環状七号線立体交差橋の現況	橋梁編纂委員会 / [編]	橋梁 17(8)	1981	—
放射 4 号線と環状 7 号線：オリンピック道路の両横綱	竹ヶ原 輔之夫 / 著	道路：road engineering & management review (286)	1964	—

東京都公報
昭和 38 年 6 月 18 日（号外 74） 公告 東京都道路の通称名の設定
昭和 59 年 5 月 1 日 公告 東京都通称道路名の設定

中野区報		
日付・号数	資料名	請求記号
昭和 39(1964) 年 9 月 18 日 第 223 号 3 頁	『中野区報』 自昭和三十七年 至昭和四十三	B82/A/62-68

インターネット情報	
中野区ホームページ 都市計画河川	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/kusei/kousou/seido/toshikeikaku/toshikeikakukasen.html
中野区ホームページ 環七沿道地区地区計画	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/machizukuri/machizukuri/chikukeikaku/nakanokukannana.html

早稲田通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区史 上巻	中野区 / 編	中野区	1943	M25/A/1
中野区史 昭和編 3	中野区 / 編	中野区	1973	M25/A/3
武蔵野方町史	中島 仁 / 編	日本史蹟編纂会	1927	M25/A
中野区勢概要 昭和 37 年版	中野区 / 編	中野区	1963	B32/A/62
中野区勢概要 昭和 38 年版	中野区 / 編	中野区	1964	B32/A/63
中野区勢概要 昭和 40 年版	中野区 / 編	中野区	1965	B32/A/65
サンモールの歩み	記念誌編集委員会 / 編	中野サンモール商店会	1989	D82/A

ブロードウェイ・自主管理10年のあゆみ	坂本 一郎 / 編集	ブロードウェイ管理組合	1984	D82/A
なかのの地名とその伝承	中野文化センター郷土史料室 / 編	中野区教育委員会	1981	M21/A
大和町うるわし	大和地域歴史編纂委員会 / 編	中野区大和区民センター運営委員会	2015	M25/A
大和町うるわし (地図編)	大和地域歴史編纂委員会 / 編	中野区大和区民センター運営委員会	2015	M25/A
実相院と沼袋、野方、豊玉の歴史	矢島 英雄 / 著	実相院	1998	M25/A
青梅街道周辺地域	中野区教育委員会 / 編	中野区教育委員会	2003	P2/A
昭和 ニュース No.44	広報部会 昭和地域ニュース編集会議 / 編	—	2022	ZB83/A
東京府史 行政篇 第四巻	東京府 / 編	東京府	1936	B23/D/4
地図で見る新宿区の移り変わり 戸塚 落合編	新宿区教育委員会 / 編	新宿区教育委員会	1985	M25/B04
練馬区史 現勢資料編	練馬区史編纂協議会 / 編	練馬区	1980	M25/B20/S
杉並歴史探訪	森 泰樹 / 著	杉並郷土史会	1975	M25/B15
いたばしの古道 (文化財シリーズ: 第45集)	板橋区教育委員会事務局社会教育課 / 編	板橋区教育委員会	1983	N50/B/19
大日本地誌大系 6: 新編武蔵風土記稿 第6巻	芦田 伊人 / 編	雄山閣	1957	N50/D/6
大日本地誌大系 12: 新編武蔵風土記稿 第6巻	蘆田 伊人 / 校訂	雄山閣	1996	N50/D/6
角川日本地名大辞典 13: 東京都	「角川日本地名大辞典」編纂委員会 / 編	角川書店	1978	291.03/ カ /13
日本歴史地名大系 11: 埼玉県の地名	—	平凡社	1993	R291.03/ ニ /11
日本歴史地名大系 13: 東京都の地名	—	平凡社	2002	R291.03/ ニ /13
東京都道路地図	—	昭文社	2020	291.36/ ト /20
練馬の道	石神井図書館郷土資料室 / 編集	練馬区教育委員会	1974	291.36/ ネ
東京の道事典	吉田 之彦, 渡辺 晋, 樋口 州男, 武井 弘一 / 編	東京堂出版	2009	685.2/ ト
神楽坂がまるごとわかる本	渡辺 功一 / 著	けやき舎, 展望社	2007	291.36/ ワ
雑録 練馬のむかし	神代 武男 / 著	神代武男	1985	—
石神井村誌	東京府北豊島郡石神井村 / 編輯	東京府北豊島郡石神井村	1915	—
東京近郊名所図会 第十六巻	—	東陽堂	1910	—
現行警視庁東京府令規全集 第2編	帝国地方行政学会 / 編	帝国地方行政学会	1920	—
八丈つむじ風	長谷川 伸 / 著	湊書房	1949	—
召集令: 日独戦争	北島 春石 / 著	春江堂書店	1994	—
東京名所図会 [第21] (西郊之部)	—	陸書房	1969	—
御府内八十八箇所考	塚田 芳雄 / 著	塚田芳雄	1975	—
京阪神都市圏総合都市交通運営計画調査報告書 交通運営の概要と交通運営手法	—	京阪神都市圏総合都市交通体系調査委員会	1979	—
警視庁交通年鑑 昭和44年	—	警視庁交通部	1970	—
東京府道路概要 (東京府土木概要; 第1分冊)	—	東京府土木部	1932	—

新聞記事	
見出し	掲載紙
これは困る—阿佐ヶ谷大場通り	毎日新聞 1959年8月31日 東京 朝刊 10頁
東京都 中野区: 大場通り近く拡張—三階建モデル商店街へ	毎日新聞 1960年2月9日 東京 朝刊 12頁
広くなる“大場通り”中野・杉並 地元の請願通る	朝日新聞 1959年4月3日 東京 朝刊 10頁
商店街を鉄筋三階建に 大場通りの六十軒	朝日新聞 1959年12月28日 東京 朝刊 10頁

雑誌記事				
題名	著者	掲載誌	出版年	請求記号
特集 あすの国土と交通: 地域交通を考える視点	グループ「あすの国土と交通」/ 著	人と国土 4 (4) (25)	1978.11	—
都市交通における渋滞緩和対策	綾田 文義 / 著	自動車工業 3 (3)	1969.2	—
大都市における交通規制	田中 和夫 / 著	警察学論集 16 (5)	1963.5	—

交通規制談義	富永 誠美 / 著	道路 : road engineering & management review (246)	1961.8	—
--------	-----------	---	--------	---

東京都広報				
大正 9 年 4 月 1 日 (号外) 東京府告示第 162 号 府縣道ノ路線認定				
昭和 37 (1962) 年 4 月 25 日 (号外) 公告 道路の通称名の設定				
中野区報				
日付・号数	資料名			請求記号
昭和 38 年 10 月 31 日 第 212 号 1 頁	『中野区報』縮刷版 No.1 昭和 24 年 3 月～昭和 39 年 12 月			B82/A/1
昭和 41 年 6 月 20 日 第 244 号 1 頁	『中野区報』縮刷版 No.2 昭和 24 年 3 月～昭和 39 年 12 月			B82/A/2

地図				
資料名	編者名	出版者	出版年	請求記号
東京都全住宅案内図帳 中野区	住宅協会 / 編	住宅協会	1958	M8/A/58
堀江家文書 (絵図) 二	—	中野区立中央図書館	1997	M8/A/2
杉並区図 昭和 59 年頃 14,000 分の 1	—	日地出版	1984	—
杉並区図 昭和 60 年 8 月現在 12,000 分の 1	—	杉並区広報課	1985	—

インターネット資料	
市川みのるオフィシャルサイト 大型ショッピングモール・コンビニエンスストアに負けない“生き残る”商店街の秘訣とは？【中野のキーマン 100 人に会う：その 6】折原烈男（中野区商店街連合会名誉会長）	https://iminoru.jp/nakano_key_person_100/%e5%a4%a7%e5%9e%8b%e3%82%b7%e3%83%a7%e3%83%83%e3%83%94%e3%83%b3%e3%82%b0%e3%83%a2%e3%83%bc%e3%83%ab%e3%83%bb%e3%82%b3%e3%83%b3%e3%83%93%e3%83%8b%e3%82%a8%e3%83%b3%e3%82%b9%e3%82%b9%e3%83%88%e3%82%a2/
杉並区ホームページ 早稲田通り【道】（下井草 4 丁目 3 番）	https://www.city.suginami.tokyo.jp/kyouiku/bunkazai/hyouji/1007946.html
東京都議会 会議録 昭和 28 年第 4 回臨時会（第 16 号）本文 1953-07-27	https://www.record.gikai.metro.tokyo.lg.jp/676965?Template=document&Id=2834#one:36
東京都議会 会議録 昭和 29 年第 3 回定例会（第 21 号）本文 1954-09-22	https://www.record.gikai.metro.tokyo.lg.jp/770117?Template=document&Id=256#one:45
東京都議会 会議録 昭和 38 年第 2 回定例会（第 10 号）本文 1963-07-05	https://www.record.gikai.metro.tokyo.lg.jp/676965?Template=document&Id=508#one:18
東京都 建設局 東京都通称道路名検討委員会 資料 3 通称道路名設定事業の経緯及び概要	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/road/information/meisho/tusyodoro
東京都 建設局 第三建設事務所の道路の管理	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jimusho/sanken/kanri

新青梅街道				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区史 下巻 1	東京都中野区役所 / 編	東京都中野区役所	1944	M25/A/2-1
中野区史 下巻 2	東京都中野区役所 / 編纂	東京都中野区役所	1954	M25/A/2-2
中野区民生活史 第 1 巻	中野区民生活史編集委員会 / 編	中野区	1982	M25/A/1
中野区民生活史 第 2 巻	中野区民生活史編集委員会 / 編	中野区	1984	M25/A/2
中野区区勢総覧	中野区役所 / 編	中野区	1940	B32/A/40
中野区報 縮刷版 No.1 (昭和 39 年 9 月 18 日号)	中野区企画部広報課 / 編	中野区	1982	B82/A/1
中野区都市計画審議会 提出資料 令和 6 年度	中野区都市基盤部 / 編	中野区	2024	E11/A/24
東京都中野区内の石仏	中野区教育委員会 / 編	中野区教育委員会	1968	M12/A/4
江古田今昔	中野区江古田地域センター / [編]	中野区	1984	M25/A
古老の語る沼袋・江古田の歴史 2	中野区沼袋地域センター / 編	中野区沼袋地域センター	1990	M25/A/2
懐かしい江古田村の生活と自然	懐かしい江古田村の生活と自然	中野区	1991	N50/A/2
江古田・沼袋：中野区民俗調査第 4 次報告	中野区教育委員会 / 編	中野区教育委員会	2004	P2/A
路傍の石佛をたずねて	中野区教育委員会 / 編	中野区教育委員会	1995	P50/A

空中写真〔中野区地域〕 第一分冊	－	日本地図センター	1997	M8/A/1
江古田の土地区画整理について	岩井 庄三 / 著	岩井庄三	1966	E12/A
中新井川の今と昔	須藤 亮作 / 著	練馬郷土史研究会	1968	M25/A
中野の庚申塔を歩く	石川 博司 / 著	庚申資料刊行会	2004	N65/A
東京府豊多摩郡誌 復刻版	東京府豊多摩郡役所 / 編	名著出版	1978	M25/B4
東京府史：府会篇 第4巻	東京府 / 編	東京府	1931	B23/D/4
東京府史 府会篇 第6巻	東京府 / 編	東京府	1933	B23/D/6
東京都都市計画概要 1973	東京都首都整備局 / 編	東京都	1974	E11/D/73
東京の道事典	吉田 之彦 / 編	東京堂出版	2009	E67/D
決戦：豊島一族と太田道灌の闘い	葛城 明彦 / 著	風早書林	2008	M51/D
東京風土図 城南・城西編	サンケイ新聞社 / 編	社会思想社	1978	N50/ D
大日本地誌大系 12：新編武蔵風土記稿 第6巻	蘆田 伊人 / 校訂, 根本 誠二 / 補訂	雄山閣	1996	N50/D/6
武蔵名勝図会	植田 孟縉 / 著	慶友社	1975	N66/D
道路行政総覧	－	道路行政調査会	1993	R681.2/ ド
兵要測量軌典 小地測量之部	陸軍文庫 / 編	陸軍文庫	1881	－
郷土史研究ノート 10	－	練馬郷土史研究会	1961	－
東京都通称道路名設定委員会報告書	東京都建設局道路管理部路政課 / 編	東京都	1984	－
現行警視庁東京府令規全集 第2綴	帝国地方行政学会 / 編	帝国地方行政学会	1920	－

新聞記事	
見出し	掲載紙
27日に全線開通 新青梅街道	読売新聞 1967年11月24日 東京 朝刊 13頁（中央版）
青梅バイパスあす一部開通 千川通り－田無市下宿	読売新聞 1967年4月19日 東京 夕刊 9頁
新青梅街道、45年に完成 四車線都心－三多摩むすぶ	朝日新聞 1965年1月29日 東京 夕刊 6頁

官報
昭和2年8月18日 内務省告示409号
昭和21年4月25日 戦災復興院告示15号

東京都公報
大正9年4月1日号外 東京府告示第162号
昭和36年3月15日号外 東京都告示第234号
昭和40年4月1日 東京都告示第287号
昭和59年5月1日（増刊37号） 公告 東京都通称道路名の設定
令和6年10月10日 東京都告示第1035号

中野区報		
日付・号数	資料名	請求記号
昭和39年9月18日号 第223号 3頁	『中野区報』縮刷版 No.1 昭和24年3月～昭和39年12月	B82/A/1

地図				
資料名	編者名	出版者	出版年	請求記号
大東京区分図三十五区之内 中野区詳細図	－	東京地形社	1933-1937	－
堀江家文書（絵図） 二	－	中野区立中央図書館	1997	M8/A/2
明治前期・昭和前期東京都市地図 2	清水 靖夫 / 編集	柏書房	1996	M8/D/2
東京府豊多摩郡野方町全図 縮尺六千分之一	－	豊多摩郡野方町役場	1929	地図ファイルB-2
明治前期手書彩色関東実測図：第一軍管地方二万分一迅速測図原図復刻版	迅速測図原図覆刻版委員会 / 編集	日本地図センター	1991	R291.3/ × /1

インターネット資料	
中野区ホームページ 都市計画審議会の開催状況（令和6年度） 令和6年度第1回資料（諮問2）	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/kusei/kaigi/fuzokukikan/toshikeikaku/kaisai/kaisaizyoukyoureuiwa6nendo.html

中野通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区民生活史 第2巻	中野区民生活史編集委員会 / 編	中野区	1984	M25/A/2
中野区区勢総覧	中野区役所 / 編	中野区	1940	B32/A/40
中野の戦災記録写真集	中野区企画部広報課 / 企画・編集	中野区	1985	N7/A
なかの史跡ガイド 増補改訂第7版	中野区教育委員会 / 編	中野区教育委員会 山崎記念中野区立歴史民俗資料館	2022	N69/A
中野交通ノスタルジイ PART1	中野区立中央図書館 / 編	中野区	2007	E80/A
中野交通ノスタルジイ PART2	中野区立中央図書館 / 編	中野区	2008	E80/A/2
サンモールの歩み	記念誌編集委員会 / 編	中野サンモール商店会	1989	D82/A
補助26号線（中野通り）拡幅問題の経過と私たちの願い	中野区北口大通り西側商店街借家人組合 / 編	中野区北口大通り西側商店街借家	1976	E11/A
鉄道にみる中野の歴史 平成10年10月	中野区立歴史民俗資料館 / 著	中野区	1998	E85/A
桃園橋の歴史	MewProduction（猫声製作所） / 著	Orangkucing Lab（猫人研究所）	2021	N 50/A
東京都政五十年史 事業史1	東京都 / [編]	東京都	1994	B22/D/1
都史資料集成 II 第4巻：焦土からの復興	東京都（東京都公文書館） / 編	東京都（東京都公文書館）	2021	B23/D/2-4
都史資料集成 II 第7巻：オリンピックと東京	東京都（東京都公文書館） / 編	東京都（東京都公文書館）	2018	B23/D/2-7
東京の都市計画	越沢明 / 著	岩波書店	1991	E11/D
東京都市計画の遺産：防災・復興・オリンピック	越澤明 / 著	筑摩書房	2014	E11/D
東京の道事典	吉田之彦 [ほか] / 編	東京堂出版	2009	E67/D
日本の道路がわかる事典	浅井建爾 / 著	日本実業出版社	2015	685.2/ア
朝日新聞社機が撮った1960～70年代の鉄道駅 首都圏 / 国鉄編	生田誠 / 解説, 朝日新聞社 / 写真	フォト・パブリッシング	2017	686.2/イ
朝日新聞社機が撮った中央線の街と駅（1960～80年代）	生田誠 / 解説, 朝日新聞社 / 写真	フォト・パブリッシング	2017	686.2/イ
日本鉄道請負業史	日本鉄道建設業協会 / 著	日本鉄道建設業協会	1997	686.2/ニ
タイムスリップ中央線	巴川享則 [ほか] / 著	大正出版	2003	686.2/ハ
図説日本鉄道会社の歴史	松平乗政 / 編	河出書房新社	2010	686.2/ズ
中野区区勢総覧	中野区役所 / 編	中野区	1940	B32/A/40

雑誌記事				
題名	著者	掲載誌	出版年	請求記号
東京の環状道路	—	東京人 2022年2月号	2022	ZG4/D/450

東京都公報
大正9年4月1日号外 東京府告示第162号
昭和36年3月15日号外 東京都告示第234号
昭和40年4月1日 東京都告示第287号
昭和59年5月1日（増刊37号） 公告 東京都通称道路名の設定

地図				
資料名	編者名	出版者	出版年	請求記号
中野区詳細図：大東京区分三十五区之内	—	東京地形社	1941	M8/A
中野区変遷地形図 第1分冊：1万分の1地形図 2万分の1迅速測図 2万分の1正式図	国土地理院 / 作成	中野区立中央図書館	1994	M8/A/1
東京都全住宅案内図帳 中野区：町別・戸別・業種別	住宅協会 / 編	住宅協会	1958	M8/A/58

地図で見る東京の変遷：明治・大正・昭和・平成の4代120 余年の歴史が読める	日本地図センター / 編	日本地図センター	1993	M25/D
---	--------------	----------	------	-------

インターネット資料				
東京都「補助第26号線（江原町）の事業に着手します」 報道発表資料 2020年03月10日 建設局 トップページ > 都政情報 > 報道発表 > これまでの報道発表 > 報道発表 / 令和2年（2020年） > 3月 > 補助第26号線（江原 町）の事業に着手	https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2020/03/10/03.html			
中野北口商店会「中野北口十字路商店会の歴史」 2021年6月11日 商店街ニュース (TOP > 商店街ニュース > 中野北口十字路商店会の歴史)	https://nakanokitaguchijujiro.tokyo/history/			
中野区公式観光サイト まるっと中野「【中野の歴史－近代編8 －】移転した中野駅－駅前広場は掘られてできた」 2017.01.06 UP 投稿者：まるっと中野編集部	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/kanko/shiru/rekishicolumn.html			

大久保通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区区勢総覧	中野区役所 / 編	中野区	1940	B32/A/40
中野区内における都市計画道路の現況	中野区都市環境部都市計画室 / 編	中野区	1990	E67/A/90
中野区の30年	中野区役所 / 編	中野区	1962	N1/A
発掘写真で訪ねる中野区・杉並区古地図散歩：明治・大正・昭 和の街角 豊多摩郡と東京市の時代にタイムトリップ！	中村 建治 / 著	フォト・パブリッシング	2021	M8/A
中野区立歴史民俗資料館常設展示図録：武蔵野における中野の 風土と人びとの暮らし	中野区 / 編, 山崎記念中野区立歴 史民俗資料館 / 編	山崎記念中野区立歴史 民俗資料館	2021	M25/A
桃園橋の歴史	Mew Production (猫声製作所) / 編	Orangkucing Lab (猫人研究所)	2021	N50/A
東部地区 昔をたずねて	青少年育成東部地区委員会環境 部 / 編	青少年育成東部地区委員会	1993	N65/A
かんのんさまとちょうじゃ	大谷 修啓 / 作画, 吉田 行子 / 撮 影, 地人館 / 制作	多宝山成願寺	1990	P82/A
成願寺：中野長者の寺	成願寺誌編集委員会 / 編纂	多宝山成願寺	1988	P82/A
なかのちょうじゃとじょうがんじ	前田 康成 / 作画, 仏教と文化社 / 制作	多宝山成願寺	2009	P82/A
牛込区史 復刻版：東京都旧区史叢刊	牛込区役所 / 編	臨川書店	1985	M25/B04
新宿区の歴史	新宿の歴史を語る会 / 文, 東京に ふる里をつくる会 / 編	名著出版	1977	M25/B04
下水道東京100年史	東京都下水道局 / 編	東京都	1989	E25/D
東京市道路誌	東京市役所 / 編	東京市役所	1939	E67/B
東京の道事典	吉田 之彦 / 編, 渡辺 晋 / 編, 樋口 州男 / 編, 武井 弘一 / 編	東京堂出版	2009	E67/D
JR 中央線：街と駅の1世紀 JR 中央線各駅今昔散歩大正・昭和 の街角を紹介	生田 誠 / 著	彩流社	2014	E86/D
江戸東京さんぽまっぷ 5：5000分の1江戸・明治・現在図・ 航空写真	—	平凡社	1995	M8/D/5
発掘写真で訪ねる新宿区古地図散歩：明治・大正・昭和の街角 四谷区・牛込区・淀橋区の時代にタイムトリップ！	坂上 正一 / 著	フォト・パブリッシング	2021	M8/B04
江戸っ子の生活	芳賀 登 / 著	雄山閣出版	1990	N71/D
東京の地名由来辞典	竹内 誠 / 編	東京堂出版	2006	291.36/ト
オオクバ都市の力：多文化空間のダイナミズム	稲葉 佳子 / 著	学芸出版社	2008	334.4/イ
「移民国家日本」と多文化共生論：多文化都市・新宿の深層	川村 千鶴子 / 編著	明石書店	2008	334.4/カ
ルボ新大久保：移民最前線都市を歩く	室橋裕和 / 著	辰巳出版	2020	334.4/ム
新大久保に生きる人びとの生活史：多文化共生に向けた大学生 による社会調査実習の軌跡	箕曲 在弘 / 編著	明石書店	2022	361.9/ミ
日本の道路122万キロ大研究 増補改訂版	平沼 義之 / 著	実業之日本社	2021	685.2/ヒ
角川日本地名大辞典 13	「角川日本地名大辞典」編纂委員 会 / 編	角川書店	1978	R291.03/ カ/13
江戸名所花暦（錦葵文庫；第1輯2編）	〔岡山鳥 / 編〕〔他〕	吉川弘文館	1911	—

官報
昭和 2 年 8 月 18 日 内務省告示 409 号
昭和 21 年 4 月 25 日 戦災復興院告示 15 号

東京都公報
昭和 37 (1962) 年 4 月 25 日号外

地図				
資料名		出版者	出版年	請求記号
豊多摩郡中野町全図：明治 44 年調査 [1：5000]	東京郵便局 / [編]	人文社	1991	M8/A
堀江家文書（絵図） 二	—	中野区立中央図書館	1997	M8/A/2
中野区変遷地形図 第 1 分冊：1 万分の 1 地形図 2 万分の 1 迅速測図 2 万分の 1 正式図	国土地理院 / 作成	中野区立中央図書館	1994	M8/A/1
豊多摩郡淀橋町・大久保村全図：明治 40 年 1 月調査 [1：5000]	東京郵便局 / [編]	人文社	1991	M8/ B
江戸切絵図：嘉永・慶応 尾張屋清七板	—	人文社	1995	M8/ B
地図で見る新宿区の移り変わり 淀橋 大久保編	新宿区教育委員会 / 編	新宿区教育委員会	1984	M25/B04

インターネット資料	
中野区ホームページ 区内の都市計画道路一覧	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/machizukuri/toshi/toshikeikaku/tosjikeikakudoro/ichiran.html
中野区ホームページ 桃園川緑道	https://www.city.tokyo-nakano.lg.jp/shisetsu/jitensha/kouen/momozono.html
新宿十二社熊野神社ホームページ 十二社熊野神社の歴史	https://12so-kumanojinja.or.jp/history/index.html
中野長者の寺 多宝山成願寺ホームページ 成願寺の歴史	https://www.nakanojouganji.jp/rekisi.html
国立国会図書館 錦絵で楽しむ江戸の名所 市ヶ谷牛込絵図	https://www.ndl.go.jp/landmarks/edo/ichigaya-ushigome-ezu.html
国立国会図書館 錦絵で楽しむ江戸の名所 内藤新宿千駄ヶ谷絵図	https://www.ndl.go.jp/landmarks/edo/naitoshinjuku-sendagaya-ezu.html
国立国会図書館 錦絵で楽しむ江戸の名所 熊野十二社	https://www.ndl.go.jp/landmarks/sights/kumanojuniso/
国立国会図書館デジタルコレクション 〔江戸切絵図〕市ヶ谷牛込絵図	https://dl.ndl.go.jp/pid/1286670
国立国会図書館デジタルコレクション 〔江戸切絵図〕内藤新宿千駄ヶ谷絵図	https://dl.ndl.go.jp/pid/1286669
東京都立図書館 TOKYO アーカイブ	https://archive.library.metro.tokyo.lg.jp/da/top
江戸東京デジタルミュージアム	https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_library/index.html
大江戸データベース 『江戸名所図会 4 巻』より「角筈村 熊野十二所権現」	https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/portals/0/edo/tokyo_library/modal/index.html?d=5693

方南通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野町誌	加藤 盛慶 / 著	武蔵郷土史料学会	1934	M25/A
車両基地：知られざる鉄道バックヤード	柴田 東吾 / 著	交通新聞社	2016	E88/A
雑色風土記	田中 敏雄 / 著	田中敏雄	1992	M25/A

走馬燈	田中 英俊 / 著	白日社	2009	N80/A
観音様の功德とともに II	—	多宝山成願寺	2010	P82/A/2
東京府豊多摩郡誌 復刻版	東京府豊多摩郡役所 / 編	名著出版	1978	M25/B4
杉並歴史探訪	森泰樹 / 著	杉並郷土史会	1975	M25/B15
コンサイス東京都 35 区区分地図帖	—	日地出版	1985	M8/B
東京の道事典	吉田之彦, 渡辺晋, 樋口州男, 武井弘一 / 編	東京堂出版	2009	E67/D
東京都都市計画道路地図復刻集	—	東京都建設局	1993	E68/D
東京都の歴史散歩 中 山手	東京都歴史教育研究会 / 編	山川出版社	1988	N65/D/2
大正、阿佐ヶ谷、高円寺。影印版 杉並町誌 附町名鑑	図版研 / 編	私設図書館 図版研レトロ図版博物館	2022	

官報

昭和 21 年 4 月 25 日 戦災復興院告示 15 号

東京都公報

昭和 59 年 5 月 1 日 (増刊 37 号) 公告 東京都通称道路名の設定

地図

資料名		出版者	出版年	請求記号
中野区全域図 昭和 8 年	都市製図社 / 作成	—		M8/A/58
東京都全住宅案内図帳 中野区	住宅協会 / 編	住宅協会	1958	M8/A/58
新聞販売店別配布区域図	—	—		地図ファイル A-40

千川通り

書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
鷺宮文化村	高橋 洋雄 / 編, 鷺宮文化村研究会 / 編	鷺宮区民活動センター運営委員会	2016	N50/A
練馬区の歴史	練馬郷土史研究会 / 文, 東京にふる里をつくる会 / 編	名著出版	1977	M25/B20
練馬の道	石神井図書館郷土資料室 / 編集	練馬区教育委員会	1974	N50/B20
練馬の水系	練馬区立石神井図書館郷土資料室 / 編	練馬区教育委員会	1976	N50/B20
練馬の伝説	練馬区立石神井図書館郷土資料室 / 編	練馬区教育委員会	1977	N50/B20
千川上水: 参考資料 No. 1	練馬区立関町図書館 / 編	練馬区	1984	N50/B20

地図

資料名		出版者	出版年	請求記号
堀江家文書 (絵図) 二	—	中野区立中央図書館	1997	M8/A/2
明治前期手書彩色関東実測図: 第一軍管地方二万分一迅速測図原図復刻版	迅速測図原図覆刻版委員会 / 編集	日本地図センター	1991	R291.3/ X/1
中野区変遷地形図 第 2 分冊	国土地理院 / 作成	中野区立中央図書館	1994	M8/A/2
野方町全図	—	豊多摩郡野方町役場		M8/A/1

官報
昭和 41（1966）年 7 月 30 日 建設省告示第 2428 号

東京都（府）公報
大正 9（1920）年東京府告示第 162 号
昭和 36（1961）年 4 月 2 日東京都告示第 231 号
昭和 38（1963）年 6 月 18 日公告
昭和 40（1965）年 4 月 1 日東京都告示第 287 号
昭和 59（1984）年 5 月 1 日公告

目白通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区史 下巻 1	東京都中野区役所 / 編	東京都中野区役所	1944	M25/A/2-1
中野区史 下巻 2	東京都中野区役所 / 編纂	東京都中野区役所	1954	M25/A/2-2
江古田の土地区画整理について	岩井 庄三 / 著	岩井 庄三	1966	E12/A
東京府史 行政篇 第四巻	東京府 / 編	東京府	1936	B23/D/4
東京都都市計画概要 1973	東京都首都整備局 / 編	東京都	1974	E11/D/73
東京の道事典	吉田之彦 / 編, 渡辺晋 / 編, 樋口州男 / 編, 武井弘一 / 編	東京堂出版	2009	E67/D
練馬の道	石神井図書館郷土資料室 / 編集	練馬区教育委員会	1974	N50/B20
北豊島郡総覧 昭和 6 年度版	大正毎日新聞社 / 編	北豊島総覧社	1932	—
東京都二十三区内交通規整要覧	警視庁交通部 / 編	東京交通安全協会	1951	—
東京風土図 第 2：現代教養文庫	産業経済新聞社社会部 / 編	社会思想研究会出版部	1961	—

新聞記事	
見出し	掲載紙
失われた「舗装平板」 新宿西落合一練馬区役所先の十三間道路	読売新聞 1951 年 12 月 12 日 東京 朝刊 4 頁
五輪道路第一号が完成 放射 7 号線西落合（新宿）谷原町（練馬）	朝日新聞 1963 年 12 月 17 日 東京 朝刊 14 頁

官報
昭和 2 年 8 月 18 日 内務省告示第 409 号
昭和 21 年 3 月 26 日第 5757 号
昭和 29 年 1 月 20 日（号外） 建設省告示第 16 号 p.8

東京都公報
昭和 30 年 12 月 15 日 東京都告示第 1058 号
昭和 37 年 4 月 25 日（号外） 公告 道路の通称名の設定
昭和 41 年 4 月 1 日（号外 49 号） 東京都告示第 257 号
昭和 58 年 3 月 31 日 東京都告示 327 号

中杉通り				
書名	著者名	出版者	出版年	請求記号
中野区区勢総覧	中野区役所 / 編	中野区	1940	B32/A/40
鷺宮の歴史をたどる 増補改訂版	鷺宮の歴史をたどる会 / 編	鷺宮の歴史をたどる会	2014	N50/A
東京府史 行政篇 第四巻	東京府 / 編	東京府	1936	B23/D/4
東京の道事典	吉田 之彦 / 編	東京堂出版	2009	E67/D
東京府道路概要	—	東京府土木部	1932	—
警視庁交通年鑑 昭和 38 年	—	警視庁交通部	1964	—
事業報告 昭和 43 年版	—	東京都建設局総務部庶務課	1968	—
事業報告 昭和 44 年版	—	東京都建設局総務部庶務課	1969	—
東京都通称道路名設定委員会報告書	東京都建設局道路管理部路政課 / 編	東京都	1984	—

地図				
資料名		出版者	出版年	請求記号
堀江家文書（絵図） 二	—	中野区立中央図書館	1997	M8/A/2
明治前期手書彩色関東実測図：第一軍管地方二万分之一迅速測図原図復刻版	迅速測図原図覆刻版委員会 / 編集	日本地図センター	1991	R291.3/メ/1
中野区変遷地形図 第 2 分冊	国土地理院 / 作成	中野区立中央図書館	1994	M8/A/2
野方町全図	—	豊多摩郡野方町役場		M8/A/1
東京都通称道路名地図	東京都建設局道路管理部 / 編	東京都	1984	E70/D

新聞記事	
見出し	掲載紙
被災防いだ道 緑の覆い	読売新聞 2007 年 8 月 29 日 東京 朝刊 都民 3 31 頁

インターネット資料	
中野区 建設委員会資料 2013 年 11 月 28 日 補助第 1 3 3 号線（中杉通り）の整備について	https://kugikai-nakano.jp/shiryou/143785752.pdf
東京都建設局 令和 5 年度第 2 回事業評価委員会 東京都市計画道路補助第 1 3 3 号線（杉並区阿佐谷北六丁目～中野区白鷺二丁目）評価対象事業説明用資料	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/about/info/jigyo-hyoka/r5/r5-2
東京都建設局 現在事業中の箇所 補助 133 号線 白鷺	https://www.kensetsu.metro.tokyo.lg.jp/jimusho/sanken/doro_seibi_top/doro_seibi_zigyokasyo
東京都建設局 「区部における都市計画道路の整備方針（第三次事業化計画）」及び「多摩地域における都市計画道路の整備方針（第三次事業化計画）」の報告について	https://www.toshiseibi.metro.tokyo.lg.jp/kotsu_butsuryu/doromou/keikaku_doro/iken_kohyo/houkoku

官報
昭和 41（1966）年 7 月 30 日 建設省告示第 2428 号

東京都（府）公報
大正 9（1920）年東京府告示第 162 号
昭和 36（1961）年 4 月 2 日東京都告示第 231 号

昭和 38（1963）年 6 月 18 日公告
昭和 40（1965）年 4 月 1 日東京都告示第 287 号
昭和 59（1984）年 5 月 1 日公告

中野区議会会議録	
平成 16 年 3 月 3 日 中野区議会予算特別委員会の会議録	https://kugikai-nakano.jp/view.html?gijiroku_id=2147
平成 16 年 3 月 16 日 中野区議会建設委員会（第 1 回定例会）の会議録	https://kugikai-nakano.jp/view.html?gijiroku_id=1403

URL 最終確認日：2025 年 6 月 30 日

協力者・機関（五十音順・敬称略）

国土地理院 地理空間情報部

東京都土木技術支援・人材育成センター（令和7年度より東京都土木技術支援センター）

中野区 環境部 環境課 環境公害係

中野区立歴史民俗資料館

練馬区 総務部 情報公開課

※冊子で使用している画像の二次利用・無断転載を禁止します。

文書番号 7 指中教図中第 82 号

中野をめぐる道

発行年月日：2025年7月31日

編集・発行：中野区立中央図書館

展示期間：令和6年12月1日（日曜日）～ 令和7年1月30日（木曜日）

〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9番7号

TEL：03-5340-5070 FAX：03-5340-5090

企画・制作：指定管理者 ヴィアックス・紀伊國屋書店共同事業体

